ペア

秋茄子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ペア

【Ｎコード】
Ｎ９８６７Ａ

【作者名】
秋茄子

【あらすじ】
異世界の軍事学校を舞台に繰り広げられる人間とヒューマノイドたちの物語。皆様、生命と機械の織り成す暖かく哀しい世界へご案内致します。

―かくれ鬼の章―

「くしっ！」
アイリス・セレンの間抜けなくしゃみに呆れたようにしながら、アスター・ヘルデライトは上着を脱いだ。
今は雨上がりで、風もあるから肌寒いけれど、季節は夏だ。アスターも黒いタンクトップにシャツを羽織っただけの薄着だった。そのシャツを脱いだから今はタンクトップだけという、今日には寒いに違いない格好で、彼はアイリスにシャツを差し出した。
「いいです」アイリスは短く断る。
アスターが風邪をひいてしまう、と思ったのもあるけれど、それ以上にまだアイリスはアスターを信じきっていないから。
「誰が貸してやるって言ったよ？暑いから脱いだの。で、邪魔だから預かっとけ」
「その格好は見てるだけで寒々しいので我慢して着といてください」
「…こっち見なけりゃいいだろ？それとも、俺から目が放せない？そんなに気になる？アイリス先生？」
彼女の後ろには公園のフェンスがある。フェンスのそばの地面に、直に腰を下ろして背中をフェンスに預けた状態で、隣り合わせにアイリスとアスターは話していた。
アスターはずっと立っているけれど。
「悪い子だね、先生？生徒の保護者に恋しちゃった？」
「違います。大体、貴方はネオンたちの製造者で、保護者じゃないでしょう？」
「保護者だよ。ネオンたちには俺以外に身寄りがいない」
「…身寄り…ね」
「ネオンたちだって人間だもん、甘えられる家族は必要でしょ？それが俺みたいな若くてかっこいいオトーサンだなんて、あいつら幸せ者だなぁ」

アスターは惚けた口調でそう言い、アイリスの頭の上に汗の匂いのするシャツを落とした。
「…」
「何？」
「…汗臭い」
「嗅ぐなよ変態」
「ホントに暑かったの？」
「シャツが汗臭くなるくらいには…」
「信じられない」
「あんたは俺の何なら信じる？」
「何も信じない」
「…なるほど」
不意に、アスターは小さく笑った。その横顔を見上げているとアスターは急にアイリスの方を見て笑みを深くし、そして彼女に覆い被さるようにフェンスに手を突いて彼女の前に屈んだ。
「かわいい顔。そんな上目遣いで見んなよ」
背中の後ろには高いフェンス。フェンスの向こうは闇に占拠され、人どころか街灯の明りも絶えた夜の道。ただ月だけが夜の一部でありながら、日の光で以て闇を浸蝕する。
「貴方、私の顔なんて見てたんですね」
アイリスが言うと、アスターは首を傾げる。
「目を合わせないから見てないのかと思った」
「目、合わせてほしい？こうやって？それでなんて囁いてほしい？何を言えば信じる？」
アイリスは少し考え、それからクスリと笑った。
「ただ、信じて、と」
アスターは少し面食らったような顔をしたが、すぐに溜め息を吐き、触れ合いそうな距離にあった顔を退けた。
「なかなかロマンチックだね、先生？」
「冗談よ」

顔が離れてアイリスは少しホッとしてそう言った。そして余裕のできたアイリスの目はアスターの肩を見る。
シャツを脱いで顕になった肩。そこに走る傷跡。
「テルルにやられたんだ。生まれたてのとき、ナイフで。喧嘩してさ…」
アイリスの視線に気付いてアスターは言う。
「おやこ喧嘩でナイフって…」
テルルはアイリスの知る限り『アスターの子供たち』の中では一番おとなしい子だ。
「置きっ放しにしてたんだよ。それを幼いテルルが珍しがってさ。遊んでたんだ」
私は黙って聞く。
「で、俺がそれナイフだぞって教えて、取り上げてやったら、テルルのやつ泣きわめいてそれを取り返すんだ。だから殴った」
「殴った!? 何をするかも分からないヒューマノイドを?」
アイリスの睨み付ける視線に、アスターは仕方ないだろ? と言葉を付け足した。
「俺は親なんだからさ。しつけも仕事の内。まぁそれで、テルルがキレて、そのナイフで切り付けてきた。俺の子ながらすごいよなぁ」
言って、アイリスの横に移動し、アスターはフェンスに背を預けて座り直す。
「あんな幼いときだったのに、きっとめちゃくちゃ俺のことが憎かったんだ…」
そしてアイリスを見る。
「言うだろ? 恨みを持って切られた傷は残るって」
アスターは勝手にそう言って笑った。隣りに移動しても、目を細めて笑っても、決してアイリスから目を逸らさず、そしてアイリスの視線を不思議な引力でその目に引きつけたまま。アイリスは彼と目を合わせたまま話を聞いた。
「…ナイフなんて、キレイに切れそうな武器でさ、そんなに深くも

ない傷だったのにこんなにくっきり痕がのこるんだもんな…。彫刻刀とかならさ、キレイに切れないから浅い傷でも痛いし治りも遅いし傷も残ったりするけどさ…」
「なんで知ってるんですか？彫刻刀で切ったら傷が残るって…」
「いや、絶対残るんじゃなくて、残る時もある、だな」
アイリスの問いを間違って受け止めたのか、それともわざとか、アスターはどうでもいいことを言い直した。
「だから、どうして知ってるんですか？」
アイリスは再度問う。
「…やるだろ？初等学校の基礎感性・図画工作で、初めて彫刻刀持って。オトコのコならさ。…切り合いとか…」
「やりません」
アイリスは溜め息を吐く。
少し風がきつくなって、彼女はアスターのシャツを体に巻き付けるように前を掻き合わせる。その時、アスターが急に立ち上がった。
「まだネオンたちの話を聞いてません」
「帰らねえよ。立っただけ。足だるくてさ。…帰ってほしくないなら、側にいてって素直に言えよ」
「…寒いんでしょ？」
シャツを返そうと脱ぎかけたアイリスを、アスターは止める。
「寒くねえ」「…別に、談話室で話せばいいものを夏とは言え結構寒い日にわざわざこんな所での面談を希望したアスターには文句もありますが、これも仕事の内なので風邪をひいても貴方のせいにしたりしません。シャツを着てください」
「…」
アスターは黙ってアイリスの目を見る。
「なんです？言いたいことがあるなら…」
「…もう一回」
「は？」
アイリスの言葉を遮ったアスターの意味不明な言葉に、彼女は眉を

顰める。「もう一回呼んで？アスターって。名前…」
「…呼んでません」
「嘘、呼んだよ？」
「信じられない」
「信じて？」
揚げ足をとられてアイリスは黙った。
「…」
「信じてくれる？」
「…馬鹿にしてるの？」
「なんでさ？アイリスがそう言ったんだろ？信じてって言ったら信じてくれるって」
「呼び捨てにしないでください！ヘルデライト氏」
「…アイリス先生」
アイリスがきつく言うと、アスターはしぶしぶ言い直した。
「…っそろそろネオンたちの話を…」
アイリスは目を逸らしてできるだけ強くそう言う。アスターはどこか遠くを見た。
「あぁーネオン、テルル、アゲート。どこにいるのかなぁ」
アスターは彼の錬金術技術を駆使して作った人型兵器たちの名を愛しげに唱える。
「…心当たりはないんですか？」
「ないね」
きっぱり言われて、アイリスは肩を落とした。
「…そう」「がっかりした？」
「しまし…」
アイリスが言葉を途切れさせたのは、アスターが不安げに彼女を見たから。
「呆れた？」
「…」
「ねぇ？」

焦れたような声にアイリスは溜め息を吐く。
「…貴方にがっかりしたり呆れたりはしません。そんなの今更…。もう呆れきって、そして諦めた上で話を聞いているので」
言うと、アスターは大きく笑った。
「そりゃねぇだろ？あんたん中の俺はどんだけダメな男なんだよ」
「…果てしなく、ですよ」
アスターは笑うのを止め、少し俯いてまた口角を上げた。
「たった一人の身寄りとか言っておいて、あいつらのこと何もわかってねぇ」
「…」
「こんなときに、探す当てもねぇ。…さすがに呆れるだろ？これは…」
アイリスはアスターの顔から視線を外して空を見た。
「…そんなことを気にする必要はありません。あの子たちは人間とは違うんだから、理解できなくて当たり前だわ」
夜の空にはぽつぽつと星が。流れ星が流れて消えた後に、流れ星だ、と気付いて、あまりの愚鈍さにアスターは笑う。
「アンタさ、ネオンたちのこと、キライ？」
「は？」
「ネオン・ガレナ、テルル・マルメロ、アゲート・ジェード。三人とも、アンタの生徒だ。そうだろ、アイリス・セレン先生？」
アイリスは黙ってアスターを見る。
「なのにアンタはあの子たちがキライなのか？あの子たちが、アンタに嫌われるようなことして、迷惑かけたのかな？」
アスターは問い詰める口調で楽しげに言葉を紡ぐ。だがその目は笑っていない。
「…それは…」
「俺の知る限りじゃ、あいつらは他の子たちと変わらない。なかなか優秀な子供たちだと思うがね？」
「優秀すぎます。今、私の、人間の生徒で一番優秀なのが男子のバ

ジル・エレスチャル。でもネオン・ガレナは女子でありながら、戦闘能力においてバジルを軽く凌ぐ。テルルも、小柄なアゲートも…バジルより、いいえ、私よりずっと強い」
「それで？」
「怖いのよ。あの力が。普通の人間には…」
アイリスが泣きそうな声で叫ぶ。闇はその声をすぐに吸収する。
「あの子たちが普通じゃない？あの力でアンタを襲った？」
「いいえ。でもあなたも言ってたじゃない？生まれたばかりのテルルがその傷を付けたって。それに彼らが普通だって言うなら、どうして親であるあなたが何にも理解できてないの？」
「…」二人はしばらく黙り込む。やがてアイリスが口を開いた。
「…寒くないですか？」
「寒くねぇ」
アスターが憮然として返す。
「嘘…」
「信じて？」
次にはアスターはもういつもの飄々とした様子に戻っていた。
「そう何度も信じません」
アイリスは少し安心しながら言う。
「ちぇっ」
「今は貴方の子供たちを心配してあげたらどうです？」
「…心配だよ。アイリス先生の胸借りて泣きたいくらい」
「…信じられませんし、貸しません。あなた今、ネオンたちの心配より、ふがいない自分を責める心の方が上になってるもの」
「その心を抉ったのはどこの誰かな？」
「…」
一瞬過ぎる沈黙。今度はアスターが破る。
「…腹減ったなぁ」
彼がそう言った途端、ラーメンの屋台のチャルメラが聞こえた。
「…ラーメンくらいならおごりますよ？」

「アイリス先生のラーメン食う姿なんて想像も付かない」「私だって食べますよ。ラーメンくらい…。でも今は食べません。お腹空いてないし」
「もしかしてダイエット？６時以降は食わないってやつ？」
「違います」
「…そう」
「いらないんですか？屋台、行ってしまいますよ？」
この場所を動きたがらない様子のアスターにアイリスがそう尋ねると、彼は少し笑った。
「店のラーメンじゃ、毒が足りないんだよね」
「毒？」
「体に悪そうレベル低めってこと。保存麺がいいなぁ。科学調味料の味の…」
「…」
「店あったよね？」
「通りの向こうに」
「買って来て？おごってくれるんだろ？」
アイリスは諦めたように溜め息を吐いて立ち上がる。
「…食べながらでいいんで、ちゃんと話してくださいね？」
「熱心だね、先生は」
アイリスは何も答えず歩き出す。
軍事学校付属の野外戦演習用の公園は以外に広く、そして夜のそこはもっと広く感じる。早足でもなかなか出口に辿り着かない。その時不意に後ろから足音が聞こえて、アイリスは振り向く。
振り向くとアスターがそこにいて、元の場所からそれほど離れていないと思って彼女は愕然とした。早足で歩いていたのに。
だけどそれは間違いでただ景色が、いや、ただアスターだけが、アイリスについて来ていたのだと知れた。
「あんた、俺の好きなお湯の量わかんねーだろ？少なめがいいんだ」
アスターはそう言った。

「わかりました」
再び歩き出そうとするアイリスの横に、アスターが並ぶ。「ってい
っても俺の言う少なめがどの程度かわかんねーだろ？あんたじゃ」
「店員さんに聞きます」
「店員にだってわかんねーよ」
「…ついてきたいならそう言えばいいのに」
「かわいくねー女。ちょっとは怖がれよ。夜の公園とか夜道とか」
「一人で待つのが怖かったんですか？」
「…ホントにかわいくね」
アスターは溜め息を吐いた。
心配してついてきてくれたことが分かって、アイリスはこっそり微
笑む。

「…昨日は雨で、日が落ちるのが早かったなぁ」
「え？」
いきなり喋り始めたアスターに向けた疑問の声はラーメンを啜る音
にかき消される。
「あいつらは、いつもの時間に、だけどいつもよりやけに暗くなり
かけた頃に、犬を散歩させに行ったんだ」
「…ネオンたちのこと？」
「ああ、雨降ってるし、危いって言ったのに…」
「どうしても行く、と？」
「ああ、大丈夫だからって…。でも帰って来たのは、犬のリードだ
けだった。この公園に落ちてた」
「リードだけ？切れてたんですか？」
私の問いに、アスターは首を振った。
「あいつらはリードを持って散歩に行くけど、いつも犬を繋がない
んだ。かわいそうだとか言って…」
「落としても不思議はないってことですね」
南さんは頷く。

「ああ…」
「その犬というのは？」
「あいつらの前に造ってた軍用犬アニマノイドのプロトタイプでペット用のカルサイトだよ」
「どうでもいいこと言ってもいいですか？」
「どーぞ」
「普通の人間は死を、怖がります。貴方は、彼らを人間だと言い、かわいがるのに、戦闘用として造ったんですね…」
「…まぁ俺も所詮は軍の人間ってことさ。それに、あの子たちを造る金も養う金も、軍じゃないと出せないんだよ。研究を続けるには、それに頼るしかないんだ」
アイリスは溜め息を吐く。
「やっぱり貴方はマッドサイエンティストですね。子供たちを造るのも、研究の一環ですものね」
「…イヤミ？」
「いえ、別に。それよりそろそろ帰りませんか？明日も学校ですし」
「あらら？もうこんな時間かよ…。たいしたこと言えなくて悪かったな」
「期待はしてません」
「あっそ」「ただし、彼らには脱走の疑いもあることだけ知っておいてください。その場合、彼らは銃殺。貴方にも管理責任が問われます」
「ただの軍事学校の生徒を銃殺かよ…」
「残念ながら『ただの』ではないんです。私たちには。それに、上級生は配属待ちの軍人の扱いをうけますから」
「…まあね」
「ある程度の機密も、情報処理演習の一環として見せてあります。データを盗まれた形跡はありませんが、彼らの記憶力は貴方もご存じでしょ？」
「わかりましたっ。あの子らは帰って来るよ」

「そう願います」
言って立ち去るアイリスの背中にアスターは声をかける。
「おやすみ、アイリス」
答えずに遠ざかる背中に肩を竦め、アスターは呟いた。
「さて、迎えに行くか…」
言ってアスターが装着したゴーグルには、略地図と三つの点が映る。
ヒューマノイドたちの発信装着から送られてくる情報で、それは三人が別々の位置にいるということを示している。

―かくれんぼの章―

『アスター、怒ってるかなぁ』
電子頭脳に直接送られてきたきょうだいの言葉に、アゲート・ジェードは溜め息を返す。
『アスターより俺のペアのやつが怒ってそう』
すると今度はもう一人のきょうだいがおっとりした口調で信号を送る。
『えー、アゲートのパートナーってだれだっけー』
『リーダーのウイスタリア・フェナスよね？』
テルル・マルメロの質問に、アゲート自身でなくネオン・ガレナが答えた。
『そうそう。うるさいんだよな、あいつ…』
アゲートは再び溜め息を吐く。
『でもでも、テルルはネオンのパートナーの方がうるさいと思うの』
テルルの言葉にネオンは、あぁ、と納得してつい一人で頷いた。
『ベリル・ティールねー。そういえばテルルのパートナーはバジル・エレスチャルだっけ？ベリルはバジルが大スキだからねー』
『そーなの！もーすっごくうるさい！』
テルルが堪えかねたように力を込めて言う。
『お前、オレのバジルに何かあったら承知しないぞ！ってやつな』
アゲートが真似して笑う。『そんなにバジルがいいなら、ネオンに変わってもらえばいいのよ。そしたらテルルもネオンとペアになれてうれしいのに』
『それは無理よ』
テルルの言葉にネオンは苦笑しながら信号を返す。
『男女ペアが原則だもんな』
アゲートも宥めるような調子で言葉を送った。
そんなネオンとアゲートに、妹気質のテルルは不機嫌をそのまま信

号にして送った。
『ねー、ところでさ、この状況ってなんなのかなぁ』
ネオンが話題を変えた。
『軍に反発する奴等の仕業じゃない？』
『あーなんかアスターに聞いたことあるー』
『アゲートがお菓子なんかにつられるからー』
『うるさいなぁ。お前らも一緒だろ？』
『でもさ、あのお菓子、あたしたちを動けなくするほどだよ？ってことはあれは、ヒューマノイドに作用する薬物が入ってたってことよね』
『テルルわかんない』
『お前そんなんだからバジルにチェスで勝てないんだよ』
『かんけーないもん！』
『あるよ』
『ちょっとアゲート！テルルいじめないでよ！それより、犯人はあたしたちがヒューマノイドだって分かっててやったってことよ』
『つまり、軍反対派じゃなくて、ヒューマノイド反対派、もしくは反アスター派の人間の犯行ってわけだ』
『えー！？アスター、殺されちゃうの？』
『そうよ！アスターが死んじゃったらどうしよう！あたし、アスターの修理の仕方なんか知らないわよ！』
『オレだって知らないよ！』
『医務員さんなら修理できるんじゃないの！？』

―仲間の章―

「ヘルデライト氏が…！？」
生徒の言葉にアイリスは首を傾げる。
「えぇ、ゆうべ、寮に電話をくれました」
「なんて言ってたの？ウイスタリア」
先生の質問にウイスタリア・フェナスは答えようと口を開くが、バジル・エレスチャルによってその答えを奪われる。
「『うちの子が迷惑をかけたね？キミのパートナーは俺が責任持って連れ戻すから、アイリス先生によろしくね』だろ？ウィスタ」
自分に微笑みかける友人に頷き、ウイスタリアはアイリスを見た。
アイリスは驚いた顔でバジルを見て、それから彼の隣りに立つベリル・ティールを見る。
「バジル、あなたもなの？ってことはベリルも？」
「オレは話してないけど」
ベリルの言葉をバジルが補足する。
「男子寮に電話がかかってきたから、俺だけ話したよ」
「先生、アゲートたちはどうしたんですか？」
ウイスタリアの問いにアイリスは黙る。
「あいつら、この間から休んでるよな？何があったんだよ、アイリス？」
「バジル、先生を呼び捨てにしないの！」
バジルを嗜めたウイスタリアにベリルが食ってかかる。
「うるさいよ、ウィスタ！バジルはお前より年上で強いんだから、指図するな！」
「ベリル、やめろよ。それより先生、テルルたちは…」
バジルが脱線しかけた話を元に戻した。
「別にネオンなんてどーでもいいけど、ペアがいないと訓練できないし、あいつらだけサボりってのもずるいよな。寮だって全寮制な

のにあいつらだけ入ってないし、だからいなくなったりするんだよ。なぁ、バジル？」
彼らのことを何も知らないベリルが、そう言ってバジルにすり寄る。
それを溜め息混じりに見て、ウイスタリアがアイリスに向き直った。
「先生、何かあったんならさがさなきゃ…。ヘルデライトさんは軍人じゃないし、アゲートたちは強いけど、まだ生徒なんだもの…」
ウイスタリアたちも、アイリスやアスターの態度から何か普通でない事態を感じているらしい。
「ヘルデライト氏は他に何か言ってたの？」
アイリスはウイスタリアに問う。
ウイスタリアは一瞬、バジルと目を合わせて、昨日の電話を思い出そうとする仕草を見せたが、すぐに首を振った。
「なにも…」
「なら、今はあなたたちは待機してなさい。何かあったとは限らないし、ネオンたちには脱走の疑いもかけられてるわ」
アイリスの言葉に三人は驚く。
「そんな…、嘘だろ？アイリス…。どうしてネオンが脱走なんかするのさ？」
「ベリル、やめろって」
ベリルがアイリスに詰め寄ろうとするのをバジルが止めた。
「オレは何も聞いてないし、あいつに変わったとこなんて…」
アイリスは眉間に皺を刻んで、三人を見渡し、言う。
「いずれにしても、本件は軍に任せなさい。いいわね？」
きつく命じ、アイリスは生徒たちの前で踵を返した。
「私は報告に向かいます。あなたたちはしばらく自主訓練してなさい」
言って部屋を出たアイリスを、バジルは追いかける。
「あ、バジル！」
ウイスタリアが声を掛けるがバジルはそのまま訓練場から出て行った。

「待てよ…」
「ベリル、自主訓練よ！」
バジルを追いかけようとしたベリルは駆け出す寸前で掴まえ、ウイスタリアはアイリスとバジルが出て行ったドアをしばらく睨むが、暴れるベリルを掴んでいるので精一杯だった。

「アイリス！」
呼び声に、アイリスは振り向く。
「…聞こえなかったの？バジル、自主訓練をしていなさい」
「なぁ、ホントにテルルたちはどうしたんだ？」
言いながらバジルは、パーティーで女性をエスコートするような優しい仕草で、アイリスをさりげなく近くの資料室に誘い込む。
「まだわからないわ。わかり次第報告します。だから訓練場に戻りなさい」
アイリスは不服そうにしながらもディスクの椅子に腰掛けた。
「…なんでそんなにきつく言うの？」
バジルはアイリスに覆い被さるようにディスクに手を突き、顔を近付けて問う。
「バジル！」
そのままキスしそうな角度に小首を傾げて、アイリスの顎に手を添える。
「苛立ってるね？アイリス…。あいつ…ヘルデライトさんのせい？」
「何を言ってるの？どきなさい」
バジルは面白くなさそうに体を放す。
「俺には厭くまで冷静、か…。夜に、遠くから見てもわかるくらい、あの人にはドキドキしてたのに…」
アイリスは首を傾げる。
「…なんの話？」
「俺、アイリスとあの人が昨晩、公園にいたの知ってるよ？テルルたちのことを話してるんだと思ったけど、違うかったんだね」

不機嫌そうなバジルにアイリスは首を振って否定する。
「もちろん、彼らのことを話してたのよ」
「嘘、じゃあなんでヘルデライトさんがテルルたちを探しに行ったこと、アイリスは知らないのさ？」
拗ねたような口調に、アイリスは溜め息を吐く。
「…私もまだ信用されてないってことだわ。そのことも含めて報告に行くのよ」
「そのことって？」
「ヘルデライト氏が何らかの方法で脱走兵たちの居所を掴んだにも関わらず報告しなかったことと、無断で、単独で彼らを探しに行ったことについて」
アイリスの言葉に、バジルは眉を寄せる。
「脱走兵？…ってテルルたちはもう脱走兵って決まってるの？」
「もちろんまだわからないわ。でもその可能性が高いの」
バジルは少し考えるそぶりを見せたが、うろんげに首を傾げる。
「…だってテルルだよ？」
「確かに彼女は幼い言動も目立つけれど、アゲートやネオンに言われたらついて行くでしょう？」
アイリスの言う通り、アゲートやネオンにべったりのテルルの性格を、パートナーであるバジルはよく知っている。
「…それは、そうかもしれないけど、でもネオンもアゲートも逃げるような奴等じゃ…」
そう、テルルの兄貴分たちが自分たちを裏切るような性格でないことも、バジルは知っている。
強くて、そのために自信に溢れているしっかり者のネオンと気のいいアゲート、そして少し子供っぽいテルル。確かに他の生徒たちとは少し違う、他者を入り込ませない彼らだけの領域を持っている感じはした。それでも彼らが確かに仲間だと、バジルには言える。
「…とにかく、決定は軍がします。あなたは戻りなさい」
「…わかったよ」

バジルは渋々、という様子で頷いた。

やっと訓練場に戻ってきたバジルを、ウイスタリアは睨み付けて声を発した。

「何してたの？バジル」

「アイリスに話を訊いてただけだよ」

ウイスタリアはバジルがアイリスを呼び捨てにしたことを今度は咎めず、じっとその目を見た。

「…私だって聞きたかったわ」

ウイスタリアの小さな声に、バジルはハッとして彼女を見る。

「私もベリルも、パートナーのことが気になるの。あなただけ、勝手なことしないで」

「…ごめん、ウィスタ」

「ウィスタ、黙れよ！それより、バジル！アイリスはネオンたちのこと、なんて言ってた？」

うなだれるバジルを庇うように立ってベリルが喚き、しかしやっぱりすぐにバジルを見て問う。

「軍はテルルたちを脱走兵って決め付けてる」

バジルは腹立たしげに吐き捨てた。

「アゲートが脱走！？」

ウイスタリアが目を見開く。

「脱走して、見付かったらどうなるんだ？」

ベリルが慌てたようにバジルとウイスタリアを交互に見る。

「生徒は一応訓練中の兵士ってことになる。しかも俺たちは上等兵候補生だ。それなりの罰があるよ」

バジルは抑えた声で返す。

「それなりって…？」

ベリルは明確な答えを求める。ウイスタリアが口を開いた。

「…銃殺刑よ」

「銃殺！？」

確かめるようにそう叫んで自分を見たベリルにバジルは頷く。
「なんてバカなことを…、アゲート…」
唇を噛み締めるウイスタリアの肩に手を置いてバジルは宥めるように言う。
「ウィスタ、まだわからないんだ。あいつらは脱走なんてする奴等じゃないだろ？」
ベリルは訳が分からない様子で首を傾げた。
「でも軍はあいつらが脱走したって言ってるんだろ？」
「ああ、だから俺たちもネオンたちを探そう」
バジルの言葉にウイスタリアが悲鳴のように声を上げた。
「何言ってるの！？バジル」
そのとき、おっとりしながらも微妙な緊張を孕んだ声が上がる。
「ねーウィスタ、さっきからいったいなんの話なの？」
「セリーズ…」
振り向いて相手を見、ウイスタリアはその名を呼ぶ。チームメイトのセリーズ・パフィオが、パートナーのシアル・クリプトンの影に隠れるようにして三人を見ている。
「ネオンたちが脱走したって、ホントなの？」
最年少でありながら大人びた口調のシアルが問うた。
ウイスタリアは迷った後、首を振る。
「軍がそう決め付けてるだけ。あの子たちがそんなことするはずないわ」
シアルは神妙な面持ちで頷き、セリーズは心配そうにシアルの服の端を握る。
「ネオンたちったら、迷子になっちゃったのかしら…。でもヘルデライトさんが探しに行ってるんでしょ？」
「ああ」
バジルが優しく微笑んでセリーズを撫でた。
「だったら大丈夫よ」
セリーズは自信ありげにニッコリ笑う。

「うん、きっとネオンたちはヘルデライトさんが見つけてくれるよ」
シアルも頷く。
バジルは微笑んだまま2人を眺めていたが、少し顔を曇らせてウイスタリアを見た。
「ヘルデライトさんが連れて帰るのを待ちましょう？バジル」
ウイスタリアの言葉にバジルは俯く。
「でも軍が…」
「だからこそ、私たちまで学校を抜け出して、脱走だなんて疑われたら困るでしょ？」
「いいよ。ウィスタが行かないならオレとバジルが探しに行く。な？バジル」
いつもの調子のベリルの様子にウイスタリアは声を荒げた。
「バカ言わないで！どうして男の子ってこう子どもっぽいのかしら。そんなだから一番年長で、私より強いのにリーダーになれないのよ？バジル」
「何だと！？」
バジルではなくベリルが喚いた。
「私たちが勝手なことしたら、先生にも迷惑がかかるのよ？」
そのセリフにはバジルの肩がぴくりと反応する。
「ウィスタ…」
俯いたままのバジルを心配そうに見て、セリーズがウイスタリアの袖を握る。
ウイスタリアはそっとセリーズを撫でて、バジルとベリルを見た。
「二人とも、頭冷やして」
「その通りね…」
戸口から聞こえた溜め息混じりの言葉にバジルが顔を上げる。
「…アイリス」
セリーズが安心したように戸口に立つアイリスに駆け寄る。
「あのねアイリス。ネオンたちがいなくて、ウィスタとバジルがケンカするの」

そう告げ口するセリーズに頷いて、アイリスは二人を見る。
「ウイスタリア、バジル。ヘルデライト氏から連絡が入りました。三人の居場所を見つけたらしいわ。三人は別々の場所に監禁されてる。軍は彼らの救出に向かいます」
バジルとウイスタリアは一瞬顔を見合わせ、それからアイリスに向かって同時に口を開こうとする。しかしそれを遮ってアイリスが口を開いた。
「ついて行きたいと言ってもダメよ。今日は全員、寮に戻って待機してなさい」
「どうしてですか？」
「これは軍の極秘任務よ。士官候補生とは言え、生徒を連れて行けるわけないでしょ？」
アイリスは言い、部屋を出る。
「生徒の救出が、極秘任務？」
ネオンたちの正体を知らないウイスタリアたちには、この任務が極秘である理由がわからない。
「どういうことかしら…」
ウイスタリアの疑問に、バジルが首を傾げた。

―仲間の章―（後書き）

適当に書きたいシーンから始めた連載ゆえ、なにも考えてなくて困ってます。
さて、どうやって続けようか、まとめようか、終わらせようか…
ぐだぐだですがお付き合いください

―始りの章―（前書き）

戦闘シーンあります。グロくはないけど、ご注意ください。

―始りの章―

「お目覚めですか？ネオン・ガレナ」
その声の主は、ネオンにまったく気配を感じさせなかった。
『ネオン、変な女の子が…』
脳に直接、テルルからの信号が送られてきた。
『俺んとこにも来たぜ。変な男子…』
アゲートからも信号が届く。
「ネオン・ガレナ？」
自分を見たきり口を開かないネオンに、目の前の少年は首を傾げる。
ネオンは二人との通信を切り、目の前の少年に集中する。
「…誰？」
こうして対峙していても、少年からはなんの気配も感じない。
「漆原黒曜といいます。あなたに聞きたいことがあるのです」
「何？」
「あなたはヒューマノイドだと聞きました」
ネオンは少し迷った末にそれを認める。
「それが？」
「僕と同じヒューマノイドなのに、お菓子に釣られて捕まったとか…」
その言葉に驚きつつ、しかし妙に納得して、ネオンは答える。
「あなた、ヒューマノイドなの？でも頭良くないのね？釣られたのはあたしぢゃなくてアゲートよ」
「でもあなたも、テルル・マルメロもお菓子を食べましたよね？」
黒曜は興味もなさそうに、ただ問うた。
「…そうね、私たちはお菓子が大スキなの。甘いのとか、いいにおいとか、成分としてしか感じとれないけど、お菓子が大スキなようにプログラムされてるのよ」
黒曜がはっとしたように声をあげる。

「それが知りたい」
「どれ？」
首を傾げるネオンに、黒曜は一歩近付いた。
「ネオン・ガレナのことが…。僕はあなたのプログラムにとても興味がある」
ネオンは首を傾げたが、少し微笑んで自分のことを話し出す。
「…そうね、例えば帰って来て手洗いうがいをしない日が三日続くと風邪をひくようにプログラムされてるわ。それに人間の学校に通うのに必要ない過剰な力はリミッターで抑えてる」

「ではリミッターを外してみてください。テルル・マルメロ」
テルルの前に現れた少女は話を聞いてそう求める。
「テルルでいいのよ？雪絹白夜ちゃん」
テルルの微笑みに白夜も同様の微笑みを浮かべる。
「では私も白夜と呼んでください」

「っても、リミッターはアスターに外すなって言われてんだよ…えっと…」
頭を掻きながらアゲートが困ったように言うと、少年が意を汲み取って名乗る。
「南手朱夏だ」
「そう、南手朱夏！よろしくな」
アゲートはそう言って笑った。

「やぁ先生」
数人の軍人を率いてやってきたアイリスに、アスターは微笑んだ。
アイリスの眉が不機嫌に動く。
「やぁじゃありません、ヘルデライト氏。あなたは自分が我が軍の重要な技術士であると共に、監視されるべき危険人物であることを

お忘れじゃありませんか？」
「忘れてた、ごめん」
悪びれずに言うアスターに、アイリスは溜め息を吐く。
「まったく、だいたい私に直接連絡すればいいものを、わざわざ生徒達を通すなんて」
「あぁ、あんたに言っても許してもらえないと思ったから…。で？その生徒達は？まだネオンたちが見付かったって知らないのかな？」
アスターは辺りを眺めて、ウイスタリアたちがいないことに気付き、尋ねる。
「…知ってます。でも寮で待機させてます」
「君の生徒達は誰も足手まといになるような弱い子たちじゃない。その自負があるから、ミス・フェナスたちは来たがっただろう？」
アイリスは首を振る。
「フェナスよりもエレスチャルが来たがってましたが、連れては来れません。素人には変わりないし、万が一ネオンたちの正体がバレて、パニックになったら大変でしょう？あなたも」
「…なるほど。お気遣い痛み入るな」
皮肉っぽいアスターの言葉にアイリスは眉を顰める。
「イヤミは結構です。それで？彼らは今どこに？」
アスターは黙って小さなモニターをアイリスに渡す。
三色の点が、バラバラに存在しているのが見て取れる。
「赤がネオン、青がアゲート、黄色がテルルだ」
「…よくもこんなものを隠していましたね？一人で探そうだなんて、無茶なことを…」
アイリスの低い声に、アスターは肩を竦めた。
「…脱走なら一人で探して、ぶん殴ってこっそり連れ戻るつもりだった。でも脱走じゃないようだったんでな、軍に助けを求めた」
「バカも休み休みにしてください。子どもじゃないんだから」
アイリスの叱責にアスターは笑う。

「あぁ、まったくだな」
アイリスは溜め息を吐くと、軍人の一人にモニターを渡して、何か言いつけ、アスターを自分の乗ってきた車に乗せた。
「あとはプロに任せて、私たちは帰って待機していますよ」
「プロ？プロっていうなら、あいつらに関して、俺以上のプロがいるのかい？」
アスターはおどけて言った。

「ネオン・ガレナ、あなたの大事なアスター・ヘルデライト博士の名誉のためにも、リミッターを外した方がいい」
漆原黒曜はそう微笑んだ。

「何故ならあなたたちはあれくらいの薬で動けなくなるような弱者じゃない…、そうでしょ？テルル」
雪絹白夜は微笑みを深くして首を傾げる。

「あのヘルデライト博士の造った子どもたちが、我々に簡単に壊されるなんて、我々のマスターも望まないんだよ、アゲート・ジェード」
南手朱夏は笑みを消して告げた。
「なんだ、友達になりにきたんじゃないのかよ？朱夏…男のヒューマノイドに会ったのは初めてだから、期待してたのに…」
アゲートはそう言って笑った。

「心配してくれてありがとう、白夜。あなたの言う通りだわ」
テルルは薬がきれたことを確認するために手を握ったり開いたりして言う。

「それにここなら、アスターも見てないし」
ネオンは悪戯っぽく舌を出してウインクした。

「いい？おとなしく男子寮にもどるのよ！二人をお願いね、シアル」
「大丈夫だよ、ウィスタ」
心配そうに言うウイスタリアに返事をし、シアルはバジルとベリルの背中を押して寮の方へ歩いて行く。
ウイスタリアはそれを見て、セリーズと共に女子寮へ戻った。

ウイスタリアと別れて部屋へ戻ってから、セリーズは窓に駆け寄る。
窓の下に三人の少年がいた。

「シアルもセリーズも、ヘルデライトさんがきっと連れて帰ってくれるって言ってたくせに」
ベリルがそう言って笑う。
「まぁね、でも仲間外れは嫌なんだ」
シアルがベリルの横を歩きながら言う。
「でもウィスタを仲間外れにしちゃったわ…」
セリーズが悲しそうに先頭を歩くバジルの服の裾を握った。
「後でちゃんと謝ろうな」
慰めるようにバジルがセリーズの頭を撫でた。
セリーズは不安げな顔のまま、コクリと頷いた。

肌と肌がぶつかったとは思えない音を発てて、ネオンと黒曜は空中で足と腕をそれぞれ繰り出す。
着地してすぐにネオンが左に傾いた。黒曜の腕に思い切りぶつけた左足が傷付いている。
「まだ人より少し硬いくらいですね。私はあなたと同じヒューマノイドなんですよ？もっと硬度をあげないと、ダメージを受けるのはあなただけです、ネオン・ガレナ」
「ホントにヒューマノイドかどうかわからなかったからね」
ネオンは左足を庇いながら言い、黒曜は肩を竦める。
「なるほど。でもこれでわかったでしょう？きちんとリミッターを

外してください」
「…そうね」
ネオンは少し迷い、脳の回線を開く。すぐにテルルとアゲートからの信号が届いた。
『ネオン、アゲート、白夜はすごく強いみたい。リミッターを外してもいい？』
『楽しそうな声だなぁ、テルル。でもこっちの朱夏もけっこう強いぜ』
ネオンは笑う。
『おんなじ状況みたいね。それなら私たち、共犯よ。リミッターを外したことは、私たちだけの秘密ね』
二人からの返事に頷き、ネオンは再び回線を切った。
「きょうだいたちとの相談は済みましたか？」
黒曜が眼前に迫りながら言う。
「あなたのきょうだいも強いみたいね」
「ええ、強いですよ。今の通信はきょうだいたちからのＳＯＳですか？」
ネオンはリミッターを外して、硬度を高め、黒曜の拳を受ける。
「そう思う？」
今度は高い音を発てただけでどちらの体にも傷は付かなかった。
「…硬さでは同等らしい」
「次は何で勝負する？」
挑発して、ネオンは壊れた左足を繰り出す。
硬度をましたそれは黒曜の脇腹に当たり、その体を撥ね飛ばした。
「あたしたちを本気にさせて、一体どうしたいのかしら？あなたのマスターは…」
「なー、朱夏。ひょっとしてさ、お前のマスターはヒューマノイドでアスターに張り合うつもりじゃねーの？」
硬質な音を発てて倒れた朱夏に、アゲートは問う。

「知らない、俺は言われた通りに戦うだけだ」
朱夏の答えにアゲートは天井を見上げた。
「言われた通りに、ね？もしかしてさ、俺たちにわざわざリミッターを外させたのは、俺たちの力をみるためで、お前はそのためのものさしにされてるってことはないか？」
アゲートの見上げた先に小さなカメラがある。
先ほどから部屋の様子を映し続けている。
「それも知らない」
「…そうか」
アゲートは視線を朱夏に戻した。
「だが、フルパワーのお前たちを俺たちが倒すことを、マスターは期待してるのかもしれないだろ？」
「…ああ、そうも考えられるな」
認めて頷いたアゲートに、朱夏は飛び上がり、アゲート目掛けて蹴りを出す。
「どちらにしても、勝負がつけばわかることだ」

「テルルは戦うことがだぁーいすきなの。だから、白夜のマスターが何を考えてたって構わないわ」
「私もです、テルル」
白夜の返事にテルルは微笑み、傷だらけの白夜を眺める。
「だけどね、ネオンとアゲートが気にしているし、私は白夜も大スキだから訊いておくの」
白夜は首を傾げた。
「…なんですか？」
「とどめを刺しても、いいかしら？」
「もちろんです、テルル…」
「おやすみ、白夜。遊んでくれて、ありがとう。白夜がいたから、ネオンとアゲートがいなくてもつまらなくなかったのよ」
テルルの腕が、白夜の胸を貫いた。

「おやすみなさい、テルル」
白夜が言った。

「やなもんね、黒曜。同じヒューマノイドの壊れる様子は…」
ネオンはしばらく瞑目していたが、やがて左足を引きずって、黒曜の入って来た扉から外に出た。
扉に鍵はかかっていなかった。

「勝負がついてもわからなかったな、朱夏…。いい勝負だったから…」
戦った部屋を振り返りながら言って、廊下を歩き出し、アゲートは舌打ちする。
「リミッターが壊れてる…。くそっ、どっちにしてもアスターにバレるんじゃねーか、リミッター外したこと…」
ぶつぶつ言いながら、アゲートはネオンとテルルの居場所を探る。
どうせ怒られるなら、とリミッターが壊れて制限をなくした脚力のままに窓から飛び上がり、屋上に登る。
上から見ると、工場のようだった。
「ふふ、アゲート見っ付けた」
可愛らしい声に振り返ると、そこには耳が片方取れたテルルと、そのテルルに肩を借りている左足がボロボロのネオンがいた。
「…ひどい格好ね」
腕の取れかけたアゲートにテルルが笑う。
「人のこと言えるのかよ」
「言えないわね」
ネオンが笑った。
「しかもリミッターが付け直せないの。壊れちゃったみたい…」
「テルルもなの」
「俺もだ」
アゲートの言葉にネオンが少し考えて口を開く。

「…それって、アスターがわざと一回外したら付け直せないように細工しといたってことかもね…」
「…そうかも」
テルルが困ったように両手で頬を押さえた。
「どうしょぅー」
ネオンが溜め息を吐いた。
「ま、諦めて怒られるしかないんじゃない？」
「…ここから無事に出られたらな」
工場の屋上に建つ小さな小屋みたいなエスカレーター室から、稼動音がする。
「誰か登ってくる…」
テルルがネオンの後ろに隠れる。「今なら負けないけどな…」
「だめよ、今普通の人間と戦ったら、絶対殺しちゃうわ」
ネオンがアゲートの肩を抑えて落ち着かせる。
「飛び下りられるかしら…」
チラリと屋上の縁から下を見たネオンの目が見開かれる。
「アスターだわ！」
ネオンの後ろから下をみたテルルの目がキュゥンと音を発てて、望遠に切り替えられる。
「マジで？」
アゲートも顔を歪めて下を見る。アスターが手を振っており、その隣りには彼らの先生が仁王立ちしている。
「アイリス先生もいる…」
ネオンが溜め息を吐く。
「っていうかバジルたちもいるケド」
テルルがアスターたちからは見えない壁を指差す。
「ウィスタだ…」
ウイスタリアがアイリスたちに駆け寄るのをアゲートが見付ける。
アスターがウイスタリアの頭を撫でてこちらを指差し、ウイスタリアの顔に一瞬、ホッとした色が浮かんだ。

アイリスが大股でバジルたちの隠れている壁に近付いて行くのが見えたとき、エスカレーターが開いて数人の軍人が現れた。
ホッと肩の力を抜いたネオンたちに、軍人たちは銃を向ける。
「…なんだよ？俺たちは脱走したんじゃないぜ！」
アゲートが声を上げるが、軍人たちは警戒を解かない。
「ネオン・ガレナ、アゲート・ジェード、テルル・マルメロか」
「そうです。意識もはっきりしてるし、あなたたちが敵じゃないことも認識できます。電子頭脳に問題はありません」
ネオンの言葉に軍人たちは銃を下ろした。
「担架を…」
軍人の中で服も歳も一番偉そうな男が部下に命じるのを、ネオンが遮る。
「痛いところはありません。テルルに肩を借りれば歩けます」
「テルルも担架キラーイ」
そう言って笑うネオンたちを異質なものを見る目で見て、軍人たちは黙ったが、すぐに彼らに近付いて、出口へ誘導する。
工場から出ると生徒達は帰らされた後だった。
「アスター！」
テルルが駆け出したために倒れかけたネオンをアゲートが支え、一緒にアスターに近寄る。
「アスター、ごめん、リミッター外した」
テルルを撫でていたのとは逆の手で、すまなそうなネオンの頭を撫でてアスターは微笑む。
「仕方ないやつらだな…」
テルルから手を離し、アゲートも撫でようとしたが避けられて肩を竦め、アスターは三人を見る。
「ま、無事でよかったよ」
「…これを無事といいますか…？」
アイリスが溜め息を吐いた。
「電子頭脳は無事なの？ガレナ」

「無事よ、アイリス先生」
「それならよかったわ」
その様子にアスターが笑った。
「アイリス先生、あれでも心配してたんだ」
「心配なんかしてませんでしたよ、ヘルデライト氏。ガレナたちが強いのは知ってるもの。でも今ボロボロのこの子たちを見て、初めて心配しました」
アゲートが首を傾げた。
「変なの、アイリス。俺たちが見付かったのに心配するんだな？」
「するわよ。とにかく、今日はゆっくり休みなさい」
アイリスは言い、車に乗り込む。
アスターがテルルの背を押してそれに続きながら、ネオンとアゲートを促した。
「帰るぞ」
ネオンは頷き、歩き出そうとしたが、アゲートが動かなかった。そして自分の右足も動けなくなっていることに気付き、そのまま二人して倒れる。
驚くアスターの隣りでテルルも倒れた。慌てたようにアイリスが車から降りてくる。
「どうしたんですか？」
「…燃料切れだ。無理したらしいからな…」
アスターは溜め息を吐いて、テルルの首の後ろを確かめる。
「心配いらない。悪いが車まで運んでくれ」
軍人の一人に言い、アスターは車の方へ行く。
アイリスはその後ろ姿と倒れ込んだ三体のヒューマノイドを見比べ、アスターを追いかける。
「心配してたんじゃないんですか？」
「してたよ。でももう大丈夫だろ？」
荷物のように運ばれるネオンたちを見て、アイリスは声をあげる。
「丁寧に運んでちょうだい！生徒なのよ」

慌てて、ネオンたちの体を持ち直す軍人たちを見てから、アイリスはアスターを見た。
「あんな扱いをされて平気なんですか？」
「いや、どこが傷付いてるかわからないからなるべく丁寧に運んでほしかったんだ。言ってくれて助かった」
淡々と言うアスターを、アイリスは睨む。
「あまり気にしていたようには見えませんでしたけど？」
「…まあね、電源は完璧に落ちてるから、メモリーが消えたりすることはないし、そう心配はいらないんだ」
アイリスはアスターの隣りに乗り込む。
「えらく態度が違いますね？」
言うと、アスターは失笑した。
「それはそうだろ？電源の落ちたあいつらは、ただの人形だ…」
「つまりあなたの興味の対象ではなくなる、ということですか？」
睨み付けるアイリスの瞳を真っ向から受け止め、アスターは頷いた。
「そういうことだ」
「優しくするのもただたんに興味があるからというだけなのね」
嫌悪感を顕にするアイリスに、アスターはクスリと笑う。
「そっちこそ、えらく態度が違うじゃないか？いつもの元気なあいつらは怖いけど、弱っている姿を見たらかわいそうになった？」
アスターは体を背凭れから離し、アイリスに顔を近付けて問う。
「…それは…」
言い淀むアイリスに興味をなくした様にアスターは背凭れに勢いよく背中を預ける。
「勝手なのはお互い様だろ？君に責められるいわれはないな」
アイリスは黙る。
アスターも沈黙し、車内が少し暗くなった様な重たい雰囲気が二人に纏い付く。
「すいませんでした」
しばらくして、アイリスの方が沈黙を破った。

アスターはアイリスの顔をまじまじと見つめ、何か言おうとしたが、その前にアスターのラボの前で車は泊まった。車のドアを外から開けられ、仕方なく車から降りる。
「今日は迷惑をかけた。また明日な、先生」
「ええ、それでは失礼します」
ドアが閉まり、ネオンたちをラボへ運んだ軍人たちが乗り込むのを待って、車は発進し、アスターはイライラと頭を掻いてラボへ入って行った。

アスターは自分のデスクへ向かい、鳴り続ける電話の受話器を上げる。
呼び出し音が途切れた。
「やぁ、いいデータはとれたかな？御手洗博士」
電話相手は何も言わないが電話を切ろうともしない。
「君の危険な実験のおかげでうちの子たちは大ダメージだ。ボディのダメージは修復できるが、同じヒューマノイドを葬ったことで心にもダメージを負った可能性がある」
電話相手が笑った気配を感じて、アスターは眉を寄せた。
「何がおかしい？」
「すまない、ヘルデライト博士。バカにしたんじゃない。むしろ尊敬してるんだ。三体のヒューマノイドの個性、思考回路、そして感情、どれをとっても私の造った出来損ない共と同じ機械とは思えない。最高だ」
電話相手は興奮した様子で言う。
「…ありがとう。だけど数を数えるのはもう終わりだ、御手洗博士。俺はあんたが気に入らない。かくれんぼの始まりだ」
「…そうか、なら私はあなたに見付からないように自分の研究を続けるよ。できればときどきあなたのヒューマノイドを借りたかったけれど、あなたも私も研究者だ。意見の相違は、残念だが仕方ない」
アスターは笑う。

「昔、共に研究していたときは気も合ったんだがな」
「まったくだ。」
「ところで、君の出来損ないと言ったあの三体は軍が押収したが、俺がもらってもいいか？」
思い出したようにアスターが問う。
「黒曜たちかい？もちろんだ。何に使うのかしらないけれど光栄だよ」
「ありがとう。それじゃあさようなら」
「もう一ついいかな？博士。あのネオンというヒューマノイドは…」
それからアスターは三日かけて六体のヒューマノイドの修復をした後、始末書を書かされた。
「…なんで俺が…」
「ネオンたちの監督者としての落ち度に対してと、ご自身の勝手な行動に対する報いです」
アイリスは淡々と言う。
「ネオンたちは反省文は？」
「彼らは何もわるくないでしょ？」
アスターは体をのけ反らせて喚く。
「くそっ、俺だけ…いや、俺たちだけ、か…？」
ふと気付いた様に、アイリスの大事に抱えている紙束をひったくる。
「あ…」
「アスター・ヘルデライトの監視役としての落ち度に対する報い、ですか？先生」
アイリスは慌てて紙束を取り換えし、机の上で端をそろえる。
「…そうです」
「移させてよ」
「何言ってるんですか？自分で書きなさい。バジルたちだって自分で書いたのに」
アイリスは言って、机の上の白紙をパンッと叩く。

「あ、あの時、寮を抜け出してきた子たちね。あの子らも反省文かぁ」
アスターはクスクス笑った。
「当然です。あなたも、もう書きたくなかったらこれからはちゃんと私に相談してください」
「え？」
「自分が会議のとき言ってたんじゃないですか？始まるんでしょ？かくれんぼが…」
アスターは窓の外を見た。
いつもの公園に遊ぶ三人の子どもたち。その中に以前はいたはずの犬は、戻らない。
「…ああ」
代わりに加わったもう三人の子どもたちは、離れた場所からただネオンたちを見ている。
六人の内の一人に目を止め、アスターはつい最近、電話で話した男の言葉を思い出す。
“あのネオンというヒューマノイドは、彼女ににてるね”
「始まってはいたのさ、ずっと前から…ただ随分長いこと、俺は数を数えてた」

E

―それぞれの章―

「バジルはあたしたちがいなくなったとき、とても心配してくれたんだってね」
訓練が終わった後、いつもどおりバジルにすり寄るベリルについてバジルの近くへ行き、ネオンはそう言った。
「そんなことないさ」
「そう？」
「ああ、テルルは俺のパートナーだし、ネオンもアゲートも仲間だから、確かに心配はしたけどね」
バジルは言って微笑む。
「そう、ありがとう。ベリルも結構心配してくれたって聞いたけど？」
「なっ！？」
端で聞いていたベリルがいきなり言われて顔を真っ赤にする。
「なんのことだよ？オレは心配なんか…」
「あぁ、ベリルはめちゃくちゃ心配して、取り乱してたよ」
バジルが涼しい顔で言う。
「そ、それはバジルだろー！」
ベリルは赤い顔のまま言い返した。
「心配してくれてありがと、ベリル」
ネオンがからかうように言った。
「し、心配なんかしてねーよ、バカ！それより、お前らのせいでオレたちは反省文書かされたんだぞ！」
そこにウイスタリアの声が飛んでくる。
「そこの三人！訓練室閉めるわよ！」
「はぁい！あ、ねぇウィスタもすごく心配してくれたんでしょ？」
元気に駆けて行くネオンの後ろ姿に、バジルは呟くのが、ベリルの耳に届く。

「似てるんだよ…」
「何が？」
ベリルの問いには柔らかい笑みが返っただけだった。
美しい中庭を、ウイスタリアとネオンは話しながら歩いていた。そこへ、強い口調の声がかかる。
「ウイスタリア！」
呼ばれて振り向くウイスタリアと共に、ネオンも振り返る。
そこに立っていたのは、中年ながら精悍な顔立ちと鍛えられた体に上品な出で立ちの紳士。
「…父様」
ウイスタリアが呟いた。
紳士が歩み寄るウイスタリアはそれをじっと立ったまま迎えた。
「どうされたのですか？学校なんかに…」
「保護者会の会合があってな」
紳士は微笑んで答える。
「それはご苦労様です。では私は次の授業がありますのでこれで」
ウイスタリアは淡々と言って紳士の脇を擦り抜ける。
「ウィスタ？次は空時間だよ？」
ネオンが声を上げ、紳士とウイスタリアを見比べる。
「そうなのかい？ウイスタリア」
紳士がウイスタリアを見て問うた。
「ウィスタったら忘れてたのね。次はアイリス先生がいなくて、休講になったじゃない？」
「おやおやウイスタリア、お前は母さんに似てうっかり者だな」
「違うのよ、おじさん。ウイスタリアはリーダーだし、とてもしっかり者よ。何か別の考えごとをしてたんだわ、きっと」
ネオンと父の会話を聞いて頭を抱えたい衝動を堪え、ウイスタリアはネオンの手をとった。
「ネオン、だから次の時間は、自主訓練しましょって言ったでしょ

？行くわよ」
「そんなこと言ったぁー？」
首を傾げるネオンを引っ張って、ウイスタリアは訓練室へ向かおうとする。
その後ろ姿に父親が声を掛けた。
「ウイスタリア」
ウイスタリアは立ち止まり、静かに振り向く。
「ところでそちらのお嬢さんはどちらのご令嬢だい？」
ウイスタリアは溜め息を吐く。
「ヘルデライト博士のお嬢さまです」
「ふん？ヘルデライト家の三人のお子様の一人かい？」
父親はネオンを値踏みするように見た。
「そうです。その一番上のお嬢さまです」
「ヘルデライト家は我がフェナス家に並ぶ名家だ。よい友達を持ったね。それじゃ、彼女も騎士科の生徒かね？」
ウイスタリアはうんざりと頷く。
「ええ、他の二人も」
「それはすばらしいね。ヘルデライト家も、現当主のアスター殿が錬金術科なんて方向に進むまでは由緒あるナイトの家系だ」
ウイスタリアは黙って聞いていた。だが、ネオンの手を握る手に力が入るのを、ネオンは感じた。
父親は一方的に話を変える。
「後でアイリス先生に呼ばれている。昼休みにミーティング室へ来なさい」
ウイスタリアは無言で一礼し、ネオンの手を引いて行く。ネオンが気遣わしげに振り向いてウイスタリアな父親を見ると父親は笑顔で手を振った。

学校に入った頃から、廊下を歩く度に、聞こえる声があった。
『ウイスタリアさんよ』

『フェナス家のお嬢さま』
『やはり騎士科へ進むのかな？』
年を経るほどに囁き声は質を変える。
『ウィスタ、騎士科のリーダーに選ばれたらしいわ』
『でも騎士科で一番年上なのはバジル・エレスチャルだし、バジルはウィスタより強いだろ？』
『ヘルデライト博士のとこの孤児はみんなめちゃくちゃ強いらしいわよ』
『仕方ないわ。だってフェナス家は由緒ただしい騎士の家系だもの』
『七光りってやつか』
ウイスタリアはせめてみっともなく見えないように、聞こえないフリをして、背筋を正して歩く。
親はウイスタリアのことなどとうに諦めて、バジルをウイスタリアの許婚にしようとしたが、それはウイスタリアが断った。
バジルに好きな人がいるのは知っていたし、それが誰かも、自分に敵う相手でないことも知っていた。
「アイリス先生…か」
ウイスタリアは呟いた。
「ウィスタ？」
ネオンがウイスタリアの顔を覗き込んできた。
「…話って何かなぁと思って」
ネオンは納得して頷く。
「なんだろねぇ？でもきっといい話よ」
ネオンたちやバジルに追いつくためにみんなに内緒で勉強や訓練をした。
「いい話…ね」
だけどウイスタリアは、騎士になりたいと思ったことはなかった。
「ネオン！」
後ろから聞こえた呼び声に振り向くネオンにつられて、ウイスタリアも振り向いた。

声の主はテルルだった。
彼女は小走りに近付いて来る。
「アスターが読んでるわ。テルルたちに白夜たちと鬼ごっこしてほしいんだって」
「白夜…？」
ウイスタリアが怪訝そうに首を傾げる。
「最近できた友達。あたしたちと暮らしてるの」
ネオンが説明する。
「小さい子なの？」
「白夜はテルルより少し大きい子よ」
ウイスタリアはまた首を傾げた。
「ウィスタも行く？鬼ごっこ」
ネオンがウイスタリアと同じ方向に首を傾げた。
ウイスタリアは首を振る。
「私はいいわ。次の授業までに帰って来てね」
「うん、じゃあね」
「じゃあね、ウィスタ」
二人は手を振ってウイスタリアと別れた。
見送ってから、ウイスタリアは溜め息を吐き、一人訓練室へ向かった。

「あとは黒曜だけよ」
テルルが言う。
「今ネオンが探してる」
アゲートは言いながら、すでに捕まえた朱夏と白夜をアスターの前に出す。
2人の服にはベッタリと水彩絵の具の手形がついている。
ネオン、テルル、アゲートの手に塗ってあったものだ。
手形は捕まった印である。
「ネオンは追いかけたり捕まえたりが苦手だけど、それにしても黒

曜は逃げるのがうまいらしいな」
アスターは手元のクリップボードの上に何か書き付けながら言った。
「ネオンは逃げたり隠れたりするのも苦手よ」
テルルがクスクス笑った。
「ヘルデライト博士、俺たちは服を着替えてもいいか？」
朱夏が溜め息混じりでアスターに問う。
「ああ、ぢゃあ二人はシャワーを浴びておいで。アゲートたちも汗かいただろ？一緒に行ってこい」
「かかないよ、汗なんか」
テルルがまた笑って、白夜の背を押し、女子シャワー室へ向かった。
アゲートも朱夏を伴って男子シャワー室へ行く。
「さてと」
アスターは公園のベンチに腰掛けて煙草に火を付けた。

「こくよーう！」
離れた場所からネオンの声が聞こえた。
「博士は冷たい」
「ん？」
ベンチの後ろから聞こえた声に、アスターは煙草を灰皿に押しつけて消す。
「俺たちを実験の対象として見る。この鬼ごっこもそうです」
「研究者だからな」
「なのに俺たちのことを、ときどき人間と混同する。俺たちは煙草の煙に害されたりしないのに、博士は俺たちの前で喫煙しない」
アスターは小さく笑う。
「親だからさ」
「それはとても非人道的なことに思えます」
アスターはまっすぐ前を向いて座ったまま、ベンチの後ろには顔を向けず、興味深げに首を傾げた。
「親と自称し、俺たちを人間のように扱いながら、それでも俺たち

を見る目は厭くまで研究者だ」
アスターは笑う。
「確かにそうだね。…ところで黒曜？ずっとここにいたのか？」
「ネオンは単純です。俺がスタート地点から動いてないなどと考えず、遠くを探している」
「なるほどね」
「しかも彼女は負けず嫌いだ。俺が見付かるまでここに戻って来ない。つまり俺を見つけられない。これ以上は無駄だと思います」
アスターはそこで初めて振り向いた。
「黒曜は冷静で心理分析能力も優れてるな。リーダー向きだ」
そして少し考えてから頷く。
「いいだろう。鬼ごっこはここまでだ。ネオンを迎えに行ってくれ」
「はい」
黒曜はベンチの後ろから立上がり、ネオンの声のする方へ向かった。
「ただし、おとなしく隠れていることは苦手みたいだがな」
黒曜がいなくなってからアスターは小さく呟いて笑った。

「ネオン」
黒曜は少し声をはって呼ぶ。
「どこですか？」
角を曲がって、黒曜は立ち止まる。
振り向いた姿勢で黒曜の方を向いたネオンの後ろに、見知った人物がいた。
「…黒曜」
ネオンに驚いたように名を呼ばれて、黒曜ははっとする。
彼女の後ろにいるのは、正確には人ではない。
黒曜たちのきょうだい。
「…ネオン、時間切れです。戻りますよ」
ネオンに近寄り、腕を引っ張って自分の方に寄せ、黒曜はきょうだいを見る。

「久しぶりですね、錦」
錦はニッコリと笑った。
「知り合い？」
ネオンが黒曜を見る。
場の雰囲気を感じたのか、自然に見える彼女の動作に隙はない。
黒曜は考える。錦とネオンならどちらが強いだろうと。錦とネオンなら、自分はどちら側にあるべきだろう、と。
錦がフッと笑った。
「黒曜、悩まなくていい」
黒曜は顔を上げる。錦は微笑んだまま言った。
「御手洗博士は、もうお前たちなどいらない」
黒曜の目が見開かれた。
「俺は様子を見に来ただけだ」
「…」
「お前たちは盗聴器もカメラも、自爆装置すら外されているようだから、囚われているなら壊すのは俺しかいないだろ？きょうだいなんだから」
錦の言葉に目を剥いたのは黒曜ではなくネオンだった。
「なっ…？」
そのネオンの手に、手を添えて彼女を黙らせ、黒曜は錦を見る。
「心配いらない。今日は帰るよ」
「逃がすと思いますか？」
「止めるのか？」
黒曜と錦が睨み合う。
「止めねーよ、帰れ。御手洗博士によろしくな」
緊張する三人の間に間延びした声が割り込む。
「ヘルデライト博士…」
錦が呟く。
「ネオン、なんなの！？」
アスターを導いて来たテルルが彼の白衣の影から恐る恐る顔を出し

た。
「信号でテルルを呼んだのか？」
黒曜が驚いたようにネオンを見る。
「こんな状況で冷静な判断を欠くようじゃ、軍人にはなれないわ。感情的になったフリをしてただけよ」
ネオンが黒曜にウインクする。
「少し、バカにしてました」
錦はフンと息を吐くとアスターを一睨みしてから立ち去った。
「ヘルデライト博士、錦のことは、朱夏たちには秘密にしてください。特に白夜は錦にひどく怯えるので」
「…黒曜、あいつはなんだ？」
「…御手洗錦。最も優秀なきょうだいで、博士の養子です」
アスターはそうか、と頷いただけで後は何も言わず、黒曜の背中を押した。
「戻ろうか。ネオンは手を洗えよ。絵の具、乾いちゃっただろ？」
「ってことは、ネオンと朱夏と白夜で罰ゲームね」
テルルが無邪気に手を叩いた。
「何ソレ！？聞いてないわ！」
ネオンが声を上げた。
「テルルとアゲートで決めたもの。黒曜、行きましょ？罰ゲーム考えなくちゃ」
テルルが黒曜の手を引いて行くのを、ネオンが追いかける。
「ちょっと、朱夏や白夜はいいって言ったの！？」
「負けた人に決定権はありませんよ、ネオン」
黒曜が笑った。

「魔導科へ？」
ウイスタリアは呆然と、アイリスの言葉を繰り返した。
「それはウイスタリアに騎士としての素質がないということですか？先生」

ウイスタリアの父親は努めて冷静に問い返す。
「そうではありません。ウイスタリアは優秀です。これは選択肢が増えるだけのことです。つまり、以前行った適性検査で、ウイスタリアには魔導への適性があると診断されたんです」
父親は黙って髭を弄る。
「ウイスタリアは騎士科を優秀な成績で卒業するでしょう。ですから、このまま騎士の道を進んでもいい。それに、魔導科へ転向するにしても、騎士科を卒業してからでもいいんです。軍に入るのは遅くなりますが…」
「話になりません。ウイスタリアは一刻も早く国の役に立てるようになりたいのです。騎士として」
父親はまるでウイスタリアの心を代弁するように胸を張って言い捨てた。
「…ウイスタリア、あなたの気持ちはどうなの？」
どこか冷めた面持ちでアイリスと父親のやりとりを聞いていたウイスタリアは、唐突に水を向けられてうろたえ、父親とアイリスの顔を見比べた後に俯いた。
「…私は、立派な騎士に、なりたいです」
「…そう…」
父親はますます胸を張り、アイリスは立ち上がる。
ウイスタリアはビクリと体を強張らせた。
「でもよかったらじっくり考えてみなさい。一生あなたと付き合うのはあなた自身なんだからね」
言って先に立ち、アイリスはウイスタリアと父親を出口まで見送るために歩きながら、アイリスはウイスタリアに語る。
「バジルは、銃士科への転向を決めたました。騎士科の中にも射撃演習はあるけど、バジルは特に射撃が得意だったものね」
「ほう、エレスチャルくんほどのナイトがもったいない」
父親が首を振りながら言った。
「各科の中に優劣はありませんから、彼には銃士が合っていたと言

うなら、もったいないようなことは何もありませんよ」
父親は聞いていないかのように何も返さず、ただもったいないともう一度言った。
ウイスタリアにはその全てが聞こえていなかった。

ウイスタリアはミーティング室でバジルと向き合っていた。
「騎士になりたいと思ったことはないわ。だけど他にやりたいこともない以上、途中でやめるようなことはしたくないの。卒業後に魔導科への転向をするかどうかは、ゆっくり考えるわ」
バジルはウイスタリアの目を見て頷く。
「お前はそうすると思ってた」
「あんたはなんで銃士科へ行くの？全部、諦めるの？騎士も、あの人も…」
「銃士科への転向は、適性検査の結果を見て決めたんじゃない」
ウイスタリアは俯く。
「最初から銃士になりたかったの？」
「銃の演習が始まってからだよ。自分は結構これが得意だって、うれしかったし、たのしかった」
「…そう。みんなには言ったの？ベリルなんか、泣きだすんじゃない？テルルも…」
「ウィスタも？」
ウイスタリアはバッと顔を上げる。
赤い顔。泣いてはいないけれど、それよりもっと切なそうな顔。
「ウィスタって、俺のこと好きだったよな」
少し迷ってから、ウイスタリアは頷く。
「…ええ」
「俺が他の人好きなことに、気付いてたよな」
「…ええ」
バジルはまっすぐにウイスタリアを見直す。
「諦めるんじゃないよ。逃げないで言うよ。アイリスに…」

「…そう」
頷くウイスタリアにバジルは手を伸ばし、しかし直前でそれを引っ込める。そして目を逸らし、話を変えるように問う。
「ウィスタさ、ネオンが少しだけ、アイリスに似てるの気付いてた？」
「え？」
ウイスタリアは怪訝そうに首を傾げた。
「なんとなくだけどさ、似てるんだ。…だからさ、ヘルデライトさんは、どっちが好きなのかなぁって…」
「…どっちも、好きなんだと思う。でもそれはバジルの好きとは違うわ」
「え？」
バジルは不思議そうにウイスタリアを見る。
「疑った？私だって女なんだから、それくらいわかるわよ」
「…すごいな、女の子は」
本気で感心したようなバジルに、ウイスタリアは微笑む。
「がんばってね」
「何言ってんだよ、お前が応援するなんて…」
「銃士科に行ってもがんばってね、って言ったの！アイリス先生のことなんて、誰が応援するもんですか」
笑って言って、ウイスタリアは俯く。
「だからいいでしょ？仲間として応援するくらい、いいでしょ？」
「…ウィスタ…」
言葉に詰まるバジルを、ウイスタリアは笑う。
「ありがとう、でしょ？あんた１９歳にもなってお礼も言えないの？」
バジルも笑った。
「生意気なやつだな、年下のくせに…」
「リーダーに対して態度がなってないのはどっちかしら？」
不意に真面目な顔で、バジルは呟いた。

「…ありがとう」
ウイスタリアは一瞬、泣きそうに目を細めて、だけどそれを笑顔に変えた。
「うん…」

ー人間の章ー

ある所に一人の赤ん坊と二人の母親がいました。母親が赤ん坊を取り合って喧嘩をするので、ある男が言いました。
『二人で赤ちゃんの腕を引っ張り合って、最後までその腕を握っていた方が本当のお母さんということにしてはどうですか？』
二人の母親は早速赤ん坊の引っ張り合いを始めます。
赤ん坊は引っ張られて痛くて痛くて泣き叫びます。
とうとう一人の母親が、泣き叫ぶ赤ん坊がかわいそうで仕方なくて手を放してしまいました。
最後まで手を放さずに、赤ん坊を手に入れた、と喜ぶ母親と、手を放して、赤ん坊をとられてしまった、と悲しむ母親に、男は言いました。
『手を放した方が本当の母親です。赤ん坊が泣いているのを見て手を放す優しいお母さんの方が本物に決まっているからです』
手を放したお母さんは赤ん坊を手に入れることができました。

テルルは本を閉じて呟く。
「でもね、泣き叫ぶ赤ん坊を大切さのあまりに手放してしまう愛と、その子を引き裂いてでも自分のものにしたい愛、どちらも究極なんじゃないかって思うの」
「わからないわ。私たちには、人間の愛なんて…」
ネオンが首を振った。
アゲートはすでに、赤い液体の満たされたメンテナンスベッドで眠っている。
『ネオン、テルル、そろそろおやすみ』
ラボのメンテナンスルームにアスターの声が響く。
ネオンとテルルはつまらなそうに返事をして、自分でメンテナンスベッドを起動させ、横になった。

アスターは溜め息を吐く。
「究極の愛、か…」
スピーカーの電源を落としてから呟き、デスクの中から写真を一枚取り出す。
アスターが持っている写真は、この写真くらいだ。
小さな紙の中に、アスターと一緒に笑っている人物。彼女にせがまれてたった一枚だけ撮った写真。
アスターは写真を撮ったり、それを飾ったりという情緒的なことに興味はない。研究資料としての写真は全てパソコンの中に入っている。
アスターはその小さな紙を、切なげな苦笑と共にデスクの引き出しにしまった。

アイリスはパソコンの画面を見て思わず机を叩いて立ち上がった。
「なんですって！？」
アイリスが見ているのは仕事用のメール画面。
『アスター・ヘルデライト博士より要請があり、彼が保有するヒューマノイドをもう三体、アイリス・セレンの生徒に加えることになりました。詳しくはアスター・ヘルデライト博士より直接お話がありますので、博士のラボへお越しください』

「ヘルデライト氏！？」
バンッと大きな音を発てて部屋に入ってきたアイリスに、ヘルデライトは微笑んでコーヒーカップを差し出す。
「やぁアイリス先生、ちょうどコーヒーを淹れたところだよ。どうぞ？」
「どうぞ？じゃありません！ヘルデライト氏！！また三体ものヒューマノイドを私の生徒に加えるなんて、どういうことですか！？」
「今、自分で言った通りだよ。俺のヒューマノイドをもう三体、あ

んたに預ける」
アスターはコーヒーを一口啜って、事も無げに言う。
「あなたは私のヒューマノイドに対する態度に不満を持ってるんじゃないの？」
「だれがそんなこと言った？俺は俺の子たちを預けるのはあんたしか考えられないと思ってるよ」
ニッコリ微笑まれて、アイリスは目眩を覚える。
「うれしくありません！これじゃ私の生徒は人間よりヒューマノイドの方が多いことになるわ！」
アイリスの言葉にアスターはカラリと笑った。
「それも珍しいよね」
「だいたい、ヒューマノイドたちには今すぐにでも軍に入ることのできる実力がすでにあるのに…」
「…戦闘に関しては、ね」
不意に真面目に、アスターが言った。
「ヘルデライト氏？」
「あんたに教えてほしいのは、人付き合いと愛国心」
首を傾げるアイリスに、アスターは少し微笑んで説明する。
「このままじゃあいつらは、自分が強すぎるために、か弱い人間たちを見下すだろう。国のためじゃなくて、自分たちの親である俺や自分たちのために戦うだろう。もちろんみんな、誰かのために戦ってるんだが、心に抑制のないヒューマノイドではそれが暴走する恐れがあるんだ。だからあんたに頼みたい」
アイリスは溜め息を吐く。
「よくもそんな危険な子たちを私に預けられますね」
そしてアスターを睨み、もう一度溜め息を吐いて言った。
「でもあなたが教えるよりはマシなことを教えますよ」

「…ということで、ウイスタリア・フェナスと南手朱夏、セリーズ・パフィオと漆原黒曜、ネオン・ガレナとベリル・ティール、テルル・

マルメロとアゲート・ジェード、雪絹白夜とシアル・クリプトン、以上のペアで訓練に当たってもらいます。新しいペアになった八名、構いませんか？」
「なんでテルルがアゲートとなんですかぁ？」
テルルが手を挙げて不満を言う。
「なんだよ、テルル？仕方ねーだろ？黒曜たちがはやく他のやつらとも慣れるための組み合わせだよ」
アゲートが眉をしかめる。
「その通りね。我慢してちょうだい、テルル」
「アイリス…我慢ってちょっとアゲートに失礼よ…」
セリーズが困ったように笑って、そっと黒曜を見上げた。
「…よろしく、ね？」
「よろしくお願いします」
黒曜は微笑みもせずに言った。
彼なりに緊張していたための態度だが、セリーズは怯えたように顔を引きつらせた。
「ウィスタって呼んでちょうだい」
「ああ、よろしく」
ウイスタリアの差し出した手を朱夏が握った。
「よろしくビャクヤ」
「…よろしく」
シアルが微笑んで手を差し出したが白夜は小さく頷いただけだった。
「…」
アイリスは一抹の不安を覚えながら、ネオンとベリル以外の生徒にはとりあえず基礎訓練をするように命じた。
そしてネオンとベリルを連れて外に出る。
「新しいペアの組み方をどう思う？」
「テルルとアゲートの組み合わせが一番最悪ね。黒曜たちは緊張してるだけだから、大丈夫だと思う」
「っていうかあいつら、バジルの代わりに軍が拾って来たんだろ？

巻き込まれて、また子どもを三人も引き取るなんてヘルデライトさんも人がいいね」
二人の意見にアイリスは溜め息を吐く。
「テルルとアゲートの組み合わせが良くないのはどうして？ネオン。あなたたちは仲良いでしょ？」
「あたしがいないからよ。あたしがいれば喧嘩してもすぐ修まるの。あたしが飽きちゃうから。でもあの二人だと、アゲートは子どもっぽいテルルをバカにするし、テルルはいじわるなアゲートに反発するし、って感じで…」
「なるほどね、仮に、あなたとテルルが代わったらどう？」
「あたしとアゲートの方は完璧ね。でもテルルと、ベリルでしょ…」
チラリと見られてベリルは不機嫌そうに首を傾げる。
「なんだよ」
「バジルとペアを組んでたときにベリルにはいじめられてるから、テルルはベリルにも反発するわよね」
ネオンが言うと、アイリスがベリルを見る。アイリスに睨まれて、ベリルはそっぽを向いた。
「だってあんなとろいのがバジルのパートナーだなんて、むかつくじゃん！？」
ネオンは溜め息を吐いた。
「テルルに合うのはバジルかシアルよね…」
アイリスは顎にてを当てて考える。
「ネオンとアゲート、テルルとシアル、白夜とベリルならどう？」
ネオンは首を振る。
「ベリルが軍のことを何も知らない白夜の世話をできるかしら？今のところ問題なのは、あたしの見る限りではテルルたちだけよ。他はきっとうまくいくわ」
そしてネオンは微笑む。
「それに、テルルとアゲートなら、万が一何か致命的な失敗があっても損害は少ない。…言ってる意味がわかる？」

アイリスはハッとする。
致命的な失敗は死に至る負傷。
「わかったわ。今のまま、様子を見ましょう。悪いわね、ネオン…」
ネオンは苦笑いして首を振った。
ベリルは意味が分からずネオンとアイリスを見比べていた。
アイリスはネオンの言いたいことを理解して、少し悲しい顔をした。

「ねぇテルル、アゲート、おやついらないの？」
ネオンが二人に問い掛けるのを、黒曜たちは見ていた。
テルルとアゲートは喋らない。
「随分ストレスが溜まってるな、二人とも…」
アスターが言いながら現れる。
「黒曜たちはペアの子にも慣れてきたわ。でもこの二人のペアはよくないみたい」「どうしてアイリスはペアを変えないんだ？」
「あたしが言ったの。もし変えたら白夜とベリルがペアになるから、あたしじゃ白夜とベリルが相性いいかどうかはわからないって」
「それで？」
アスターは首を傾げる。
「ベリルと白夜が相性悪い方が、アゲートとテルルが相性悪いのより危険だって言ったのよ」
テルルとアゲートが致命的な失敗を犯すよりも、白夜とベリル、特にベリルが致命的な失敗を犯したときの方が損害は大きい。
テルルとアゲート、それに白夜は人形だからアスターがいれば修理ができるし、もし、修復が不可能でも、破棄されるだけだ。
しかしベリルはそうはいかない。彼はたった一つの命を持つ人間だから。
「だからアゲートとテルルも我慢してペア組んでるんだけど、特にテルルのストレスはひどいみたいよ」
アスターはネオンの頭を優しく叩く。
「おいで、テルル、アゲート、黒曜、朱夏、白夜…」

五人を呼び寄せ、それぞれの頭を撫でて言う。
「いいか？お前たちは強いから、自分よりも仲間の、人間たちの命を気遣わなきゃいけない」
六体のヒューマノイドが神妙な顔で頷く。アスターは優しく微笑んで目を閉じた。
「それでも、お前たちは代えのきく、大量生産のロボットじゃない。忘れるな。お前たちにも、死んで悲しむ人がいること…」
「わかってるわ、アスター。アスターは悲しんでくれるって…」
テルルが嬉しそうにアスターにすり寄って言い、黒曜たちは俯く。
アスターは苦笑し、彼らを順番に撫でた。
「お前たちだってもう、俺の大事な家族だよ」
白夜が少し、目を細めた。

ー誰そ彼ぞの章ー

君は僕が好きで、僕は君が大切で…。でもそれは、口に出すだけで僕らの関係を壊す、悪い呪文だったね。
だからあえて僕は、別れの時にこの呪文を口にした。
もう君が、僕を追わないように。もう僕が、君を苦しめないように。

「こんなとこにいたのね、バジル」
後ろから声をかけれて、バジルは振り向いた。
屋上の風は冷たく強く、彼女の髪を弄ぶ。
「リリー…」
言ってバジルは、視線を元に戻す。
リリー・セレンはセレン家の次女。アイリスの妹だ。髪はアイリスの栗色と違う黒。生意気そうな口許と小柄な体付き。アイリスとは似ていない。
唯一、その気の強そうな茶色の目だけ、アイリスの影を垣間見せるが、それも冷静で真面目なアイリスとは真逆の天真爛漫な性格にかき消される。
リリーは銃士科でのバジルのパートナーだ。
「あ、お姉ちゃんだ」
リリーはバジルの見つめる先に野外訓練中の騎士科を見留める。
「バジル、騎士科に未練あるの？」
リリーの率直すぎな質問にバジルは首を振る。
「ないよ」
「なら騎士科の誰かに未練があるの？」
バジルは苦笑した。
「…それも、ないよ。なんで？」
フェンスに向かって立ち尽くしてるみたいにボーッと野外訓練場を見ていたバジルがリリーを見る。逆に問われて、リリーはバジルの

隣りに寄った。
「そんな顔して見てたから」
「そうかな？」
「そうよ」
「そうかもね」
「…」
「…」
しばらくの沈黙の後でリリーが拗ねたように言う。
「…言いたくないならいいわよ」
「…言い方がわからない」
バジルの言葉に溜め息を吐いて、リリーは体を反転させた。
そのままフェンスに背中を預けようとした彼女の、背中とフェンスの間に、バジルは手を差し入れた。
「きゃっ？何よ？」
リリーが短く悲鳴を上げ、顔を赤くしてバジルを見る。
バジルはきょとんとしてリリーの赤い顔を見つめ、やっとリリーが怒る理由に思い至って謝った。
「あぁ、ごめん。このフェンス、もたれたら服汚れるから…」
「え？」
見るとリリーの背中とフェンスに挟まれたバジルの袖が、フェンスに触れたところだけ僅かに黒くなっていた。
「あ…」
「ごめん、咄嗟に声が出なくて…」
言って肩を竦めるバジルを、リリーは見る。
「…バジル？」
「え？なに？」
「あなたモテるでしょ？」
「…え？」
「ネオン、右から行け。オレは逆から回る」

「わかった。油断しないでね」
ネオンとベリルは息を潜めて言い合う。
「ウィスタはベリルを狙ってください」
「どっちから来ると思う？」
「…たぶん二手に別れて来るでしょうから、ギリギリまで引きつけて、それから俺たちも別れましょう」
「了解」
ウイスタリアはじっと様子を伺う。

「上から見ると丸分かりだね」
唐突にリリーが言った。
「あ、ああ…」
バジルは話の流れについて行きかねてもたついた返事を返す。
「バジルもあの中にいたのね」
「…うん」
「そのときここから見てたら、今バジルが何考えてたかわかったのかな」
「…どうかな？」
バジルが小さく微笑んだとき、騎士科の演習は終わった。
「あの女の子強いね」
「誰？どっち？」
「小さい方」
「あぁ、ネオン？強いよ。騎士科で一番じゃないかな？新しく入った三人は、俺は知らないけど…」
バジルの懐かしそうな眼に、リリーは見入った。

「ネオン、シャワー行こ」
ウイスタリアやセリーズ、白夜とシャワー室へ向かうテルルに誘われたがネオンは断った。
「先に行ってて、私アイリスのとこ行くから」

「なぁに？ネオン、何したの？」
セリーズがおかしそうに笑った。
「何もしてないわよ。…ウィスタ、私、次の時間休むわ」
「どうしたの？」
ウイスタリアが心配そうにネオンを見た。ネオンは笑う。
「なんか調子悪いの」
「…ネオンが？」
白夜が怪訝そうに、ネオンを見た。
彼女が疑問に思うのは当然のことで、ネオンは少し笑っただけで何も言わなかった。

ネオンはアイリスを探す。
教官室にいなかった。
アイリスの行き先で思い当たる場所が他になくて、ネオンはアスターのラボへ帰ってみることにした。
予想通り、アイリスはそこでネオンの保護者と喧嘩腰に話をしていた。
「とにかく、俺は今から出かける。お前は出て行け」
「話は終わってませんよ！？ヘルデライト氏！だいたいお前って…」
「いやなら自分こそいい加減俺をファミリーネームで呼ぶのやめろよ」
「関係ないでしょう！？それより、勝手に出かけるなんて…！待ってください、ヘルデライト氏！！せめて行き先を教えないと、ここから出すわけにはいきません！」
ネオンは首を傾げる。
「…ただいま。アスター、どこか行くの？」
「ネオン…」アスター・ヘルデライトはネオンの顔を見て、しめたとばかりに命じる。
「ネオン！アイリス先生を押さえろ！」
ネオンは咄嗟に返事を返し、アイリスの手を掴んで引き寄せ、首に

腕を回して押さえる。
「なっ！？何を…ヘル…ちょっと…ネオン・ガレナ！放しなさい！！」
「…え？」
ネオンは一瞬何を言われたかわからない。
「俺じゃなくて上官の命令を聞くように、教育しなおしといてくれ。頼んだよ、アイリス先生。いい子で留守番するんだぞ、ネオン」
アスターは微笑んで出て行った。
「あ、待ってアスター！あたし…」
ネオンが慌ててアイリスを放し、呼び止めるが、アスターはすでに扉の向こうを遠ざかっていた。
アイリスが咳き込むのを見て、アイリスは慌ててその背を擦る。
「ごめんなさい、アイリス…あたし…」
うろたえるネオンに、アイリスは溜め息を吐いて、教官として聞くべきことを訊いた。
「…どうしてこんなところにいるの！？」
「ごめんなさい…、体の、調子が悪くて…アイリスを探してたの…早退したくて」
アイリスは首を傾げる。
「どうしたの？テルルたちはなんともないんでしょう？故障かしら…何かしたの？」
ネオンは首を振った。
「ううん、でもテルルたちと私は違うから…」
ネオンとテルルたちは構造が同じだというだけで個性もきちんとある。人間たちが構造が同じでも一人一人違うように、ネオンたちがちがうのも尤もだと、アイリスは頷く。
「それはそうね、ごめんなさい」
ネオンは首を振った。
「違うの。そうじゃなくて、黒曜たちとテルルやアゲートが違うようにあたしとテルルたちもちがうのよ」

「…どういうこと？」
ネオンは微笑んで、自分でメンテナンスベッドを起動させる。赤い液体がベッドという名の水槽を満たす間、ネオンはアイリスに言った。
「アスターが出かけるなら仕方ないわ。これでできるだけメンテナンスしてみて治らなかったらあたしはしばらく休むかも知れないわ」
アイリスは頷く。
「仕方ないわね、大丈夫なの？」
「アスターではあたしを完璧に維持することができないの」
ネオンの不可解な言葉の端々に寂しさを感じてアイリスは戸惑う。
「…どういうこと？」
「アイリスはアスターの研究者になる前のことを知ってる？」
「え…」
「アスターが騎士だった頃のことよ」
ネオンは赤い液体の満ちた円柱状の水槽を見上げる。
「…騎士？」
「ヘルデライト家は騎士の家系だもの、当然でしょ？でもアスターのあの足ね、義足なのよ。あたしたちの足と同じ構造のね」
アイリスは目を見開いた。
「あたしは知らないけど知ってるの。それはあたしがある女性の記憶を全てもらったから。あたしはね、アイリス、アスターの子どもじゃないの」
ネオンはメンテナンスベッドに入りながら言う。
「メンテナンスは暇なの。アイリス、話相手になってよ」
アイリスは返事をせず、けれど動かなかったからネオンが椅子を勧めると黙ったまま腰掛けた。
「あたしは寧音（ねおん）という一人の女性技術士に、その人の分身として造られたの」
寧音・S・ガレナは軍の技術士であり、アスターの義足の整備士で

もあった。
「まったく！あんたたち、騎士はあたしたちの気持ちを全然わかってない！」
義足の整備をしながら寧音は言う。
「技術士や医務員たちが自分たちの無力に憤りながら泣く泣くあんたたちを戦場に送り出してるってのに、そうやって自分たちだけ戦ったみたいな顔して、こっちの気も知らずにさ、あたしたちを守るために身も心もボロボロになって帰ってくるんだ」
寧音のその小言は聞き慣れたもので、アスターは聞くともなしにそれを聞いていた。
アスターの、怪我をした腕に包帯を巻いていた看護師が小さく苦笑した。
「やれ何人殺したの、やれ誰某が死んだの、どこでやられたの…こちとら傷付く姿が見たくてわざわざ前線までくっついて来てるわけじゃないんだよ？」
寧音はアスターを睨む。
「聞いてるの！？」
「聞いてるよ、ごめん…」
アスターはいつもそう言って、戦場へ出る。
「わかったらたまには元気に帰ってくるんだよ！」
そう怒られる度に、アスターは理不尽さと共に、胸が暖かくなる安心を感じていた。
その日も、いつも通りだった。
「寧音…」
彼らの帰るべき陣営が、敵の砲撃に墜ちるまでは。
「ね…おん…？」
何度も、アスターはその名を呼んだ。
「あぁ、確か今日は命日なんだったわ。寧音の…。そしてネオン・ガレナが自分だけの記憶を持った初めての日」

ネオンが目も口も閉じたまま、音声だけで語る。
「…アスターは義足の不調を訴えるようになり、それは誰にメンテナンスさせても完璧にはならなかった。結局彼は、前線から退いたの」
アイリスは黙った。
「あたしはその寧音・Ｓ・ガレナの作品。陣営が墜ちるその前日までの彼女の記憶全てを持つ分身…」
ネオンの声は消えそうに響いた。
それは彼女がその赤い液体の中で、深く眠ろうとしている合図なのだが、アイリスはネオンが深く沈んで消えようとしているような錯覚を覚えた。
「アイリスは…似てるわ。あたしに。…彼女、に…」
プツリと音のしそうな唐突さでネオンの声は消えた。
彼女にとっては母胎とも言える円柱状のベッドの中で、その意識はブラックアウトしたのだ。
メンテナンスベッドの端のパネルには『１２０ｍｉｎ』と表示されていた。
「…二時間、か」
アイリスは溜め息を吐いた。
アスターの行き先を訊きたかったのだが、ついネオンの話に聞き入っている間に彼女は二時間は何か非常事態が発生しない限り目覚めない眠りについた。

「お姉ちゃん」
教官室前で呼び止められて、アイリスは立ち止まる。
「リリー、学校では先生って呼んでちょうだい」
溜め息混じりに振り向くと、妹のリリー・セレンが立っていた。
「はぁい、アイリス先生」
「どうしたの？」
「見えたから呼んだだけ」

アイリスはまた盛大に溜め息を吐いた。
この妹はいつまで立ってもベタベタと甘えてくる。
それがうれしい時もあるが心配な時もある。
「バジルは元気？」
「うん、私のパートナーよ」
「そうなの？」
アイリスはしばらく話に付き合うことにした。
自分とは、父親譲りの目以外の全てが違う妹に、結局アイリスは甘いのだった。

「ネオンが？」
「ええ、調子が悪いんですって」
アゲートに答えるウイスタリアは心配そうに眉を寄せている。白夜が言葉を継ぐ。
「しかもヘルデライト博士が留守らしい。今日は休むから、アゲートとテルルを頼む、と言われた」
「だから今日は喧嘩しないでね」
ウイスタリアに言われて、アゲートはテルルをチラリと見る。
「…わかった」

ネオンが目覚めるとアゲートとテルルがいた。
「あれ？授業は？」
「終わったわよ。ネオン、ずっと寝てたの？」
「メンテナンスベッド、二時間にセットしといたんだけど治らなくて…」
アゲートがパネルを操作してネオンのメンテナンスベッドの記録を見る。
「やっぱ俺じゃわかんねー。アスターが帰ってくるの待つしかないか」
ネオンは少し笑った。

「当たり前でしょ？弄らないでよ」
アゲートははいはいと二回返事してパネルから離れた。

「アイリス…」
門の前で、アスターは呟いた。
「何も知らない私が、あなたの監視役でよかったんでしょうか…」
アスターはバレちまったか、と呟いて後頭部を掻いた。
「…何も知らないから、よかったんだ。話さなくて済むだろ？」
「でも知ってしまいました」
「ネオン、だな？」
アイリスは頷く。
「あいつが言ったんなら、いいさ」
俯いたアイリスに、泣くかな、と警戒しながらアスターは微笑む。
「これからもよろしく」
「…はい」

「未練、か…」
背の高い門に背中を預けて、アスターとアイリスには見えない位置でバジルは、リリーの言葉を声に出してみた。
逃げたつもりはない。なのにこうも引きずるのは、まだ何も、言ってないからだ。

僕が彼女を好きなこと、君は気付いてたよね。だけど変わらず僕を見ててくれる君に僕は安心していた。

ー誰そ彼ぞの章ー（後書き）

ヘルデライトの過去にいる、アイリスに似た女性については、前から考えてましたが、まさか彼女がネオンの制作者だとは思いませんでした。

リリーも、ホントは騎士科に入れて、バジルもそのまま騎士科にいて、人数合わせのつもりで作ったキャラですが、このままだと自分のキャラが薄くなることを危惧したバジルが銃士科へ行ってしまったのでリリーも銃士科になりました。

―王の章―

「ネオン！髪がきれいにできないー！」
妹分の喧しい声に、ネオンは耳飾りを付ける手を止めた。
「やってあげるから来なさいよ」
言うとテルルは嬉しそうにネオンのそばへやってくる。
ネオンはさっきまで自分の座っていたドレッサーの前をテルルのために空ける。
テルルはそこに座って、鏡の中の自分を睨んだ。
「ねぇネオン、私、化粧地味？」ネオンは鏡を覗く。幼さと女らしさの共存するテルルの顔は、薄く施された化粧がよく合って美しい。
「そのくらいでいいわよ。あんまり濃いと変だわ」
そう言うネオンの顔も、整った造りの上に薄く化粧が施されている。
「俺たちも出席するんですか？」
騎士科の学生の正装に身を包み、気後れ気味の黒曜がネオンたちに問うてくる。
「当たり前でしょ？騎士科は全員出席。それに私たち一応ヘルデライト家の関係者ってことになってるんだから、ねぇ？白夜」少しかっちりとした甘さのないデザインだが白がとてもきれいなドレスを着て嬉しそうなネオンが、同じく正装した白夜に小さく微笑んだ。
「でも学生は全員一緒の正装なんてつまんない」
テルルが膨れる。白夜が笑った。
「だけど騎士科のドレスは白くてきれいじゃないか」
「嬉しそうだな、白夜」
朱夏がきつそうに詰め襟をはずしながら言う。
「あ、何はずしてんだよ！？俺だって我慢してるのに！」
「だって息が詰まるんだよ！この服…」
朱夏が言い返す。
「俺たち息なんてしてねぇじゃねぇか！てめぇ、アスターの親戚の

即位式だぞ？アスターに恥かかす気か！？」
「息詰まるってのぁ言葉のアヤだ、聞き流せよ。ってか俺、いくらヘルデライト博士の親戚でも剣王なんてのに興味ないもん」
この国の王は世襲によって決まるものではない。
もっとも強い騎士が王となる。
これを剣王制度という。
ここ数年、王の地位は、名門ヘルデライト家と、同じく名門のフェナス家の人間に占められている。そして、予てより体調の思わしくなかった先王が身罷り、今日即位する王はヘルデライト家の者、つまりアスターの縁者に決まったのだ。
といっても、アスターには何の得もない。
「王の近親者で、王族の待遇を受けられるのは王の二親等以内の血縁者だけだろ？ヘルデライト博士関係ねーじゃん」
それどころか今回剣王になったのは分家の人間だ。
国と家は関係ないので王になるのに本家も分家も関係ないのだが、分家の人間が王になれば本家の人間はおもしろくない。
その皺寄せが、本家の長男でありながら騎士にもならずにのらくらしているアスターにくるのは必至で、アスターとしては本当に何の得もないのだ。だがそれはそれとしてネオンたちは即位式の後のパーティーが楽しみで仕方ない。
アゲートはアゲートでヘルデライト家のその辺の事情にはなんとなく気付いているので、せめてアスターに恥をかかすまいと考えているのだが…。
「おぅお前ら、にぎやかだな」
現れた当のアスターはネクタイを締めてすらいなかった。
「っんだ！？そのよれよれの盛装はぁっ！！」
アゲートが吠えた。
「あ？何？」
アゲートは徹夜明けの髭面を指差して怒鳴る。
「お前がそんな格好してていいのかよ！」「はぁ？いいーんだよ。

今度の剣王、俺のツレでさ、今更盛装なんてハズい…」
アスターが恥ずかしそうに後頭部をかいた。そんな仕草、かわいくもなんともない。
「そんな問題じゃねー！！即位式と結婚式くらいはどんな悪友のでも盛装しろよ」
卓袱台があればひっくり返さんばかりのアゲートを見て、テルルがアスターを着替えさせるために彼の部屋に連れて行く。
「アスター、着替えましょ。ちゃんとした盛装、昨日クローゼットに用意してあげておいたでしょ？」
仕方なく背中を押されながらアスターは部屋を出て行った。結局、ヘルデライト一行が即位式がおこなわれる剣王の城に着いたのは式までは時間があるが騎士科の集合にはだいぶ遅れた時間だった。
アスターは騎士科でもないのに、遅刻一行の代表としてアイリスに叱られていた。
その後のパーティーでは、アスターは本家と分家両方の親類から嫌味を言われていたが、気にも留めずに酒を飲んでいた。
「アスター、嫌味言われてる…」
テルルが心配そうにアスターの方を見ながら言う。
「ヘルデライトさんはあまり気にしてないみたいよ？」
ウイスタリアが言った。
「慣れてんだよ。いつものことだし、言わせとくのが一番だ」
アゲートが言って、ジュースを酒のように飲み干した。その時、騎士科の面々の周りの人垣が割れた。
カツ、カツ…と、ゆっくりした足音だけが響く。
「久しぶり、アイリス。ネオン・ガレナさんはいるかい？」
アイリスは微笑んで礼をとる。
「おめでとうございます。アレイ陛下」
現れたのはは剣王アレイ・ヘルデライト、その人だった。
周りの客たちがこちらを見ている。
このあとのダンスの相手を見定めたいのだ。

「ありがとう、アイリス。敬語なんか使わなくていいよ？リーダー」
アレイはおもしろそうに笑う。アイリスも少し笑ったが敬語のまま会話をする。
「相変わらずですね」
「君もね」
変わらないアイリスの真面目さにアレイは肩を竦めた。
「アイリスは剣王の学生時代のリーダーだったの？…ですか？」
テルルが丸い目で剣王を見上げる。
「そうだよ。君は？ネオンさん？」
「ネオンはこちらです陛下…」
ウイスタリアがネオンの背中を押してアレイの前に出す。ネオンは剣王を見上げた。
「なるほど、ホントにそっくりだ」
言われてネオンはニッコリと微笑んだ。
「…はじめまして」
「はじめまして。君を見たかったんだ。僕とアスターは彼が軍にいた時、『彼女』を取り合った仲なんだ。僕は子どもだったからアスターにとられちゃったけどね」『彼女』が誰か、知っているのはネオンとアイリスだけだ。
「知ってます。…『私』に用があるんですか？」
「そう、君に用があるんだ。ぜひお相手を願えないかなと思ってね？」
アレイの言葉にネオンよりも先にセリーズが黄色い声を上げた。
「お相手ってダンスのですかぁ？」
「あぁ、ダンスもぜひお願いしたいけど、まずはこっちで」
そうセリーズに微笑んで、再びネオンを見たアレイが見せたのはサーベルだった。
「アレイ…、剣王自ら、ご自身の即位パーティーで余興を見せる必要なんかないでしょう？」
アイリスが困ったように言った。

「どうして？せっかく最強の騎士の誉れを戴いたんだから少しくらいいいだろ？それに興味があるんだ。彼女は今、騎士科で一番強い子だろ？」
「アレイ…」
「臣下は帯刀を禁じられてるんですよ」
アイリスを制して、ネオンがきっぱりと言う。
「持って来させるよ」
「…わがままですね」
「よく言われたよ。『彼女』にも」
「ここでやるんですか？」
「うん、外の方が楽しいんだろうけど、あいにく雨が降りそうだからね」
剣王のそばによった男が彼に一振りの剣を渡す。
彼はそれを受けとってネオンに渡した。
「久しぶりね」
剣を受け取るために近付いたとき、ネオンはアレイにだけ聞こえるようにそう言った。アレイはまた、ニッコリと微笑んだ。

場は騒然としていた。「なぁアイリス、これネオンが勝っちまったらどうすんだよ」
アゲートが真剣に心配しているのに、ベリルは笑う。
「まさか、相手は騎士の中の騎士だぞ？」
アイリスは堅い顔をしているだけだった。

場がざわりとする。
ネオンがリーチを埋めるべくアレイの胸に飛び込んだ。
まるで抱擁を求めるように入り込んだネオンの、その手に握られた剣を剣王が受け止める。
剣と剣が噛み合って耳障りな音が発つ。その音を振り払うように、そのことで生まれる隙を恐れもせず、ネオンは大胆に舞うように腕

を外に払った。
切っ先が離れる。
ネオンの動きは優雅だが剣を押し返して払う先程の戦い方などは実は力技だ。
「乱暴だな…」
アレイが笑って、ネオンの隙を突く。
すぐさま返ったネオンの剣が、さっきとは逆にそれを受け止める。
同じように切っ先を払った反動でアレイがよろめいた。
その隙を見逃さず、ネオンはアレイに向かって切っ先を繰り出す。
その切っ先を、よろめいたかに見えたアレイの剣が優しくいなした。
勢いをつけすぎたネオンが逆によろめき、その手からアレイが剣をたたき落とした。

「あ…」
テルルが信じられないと言うように声を上げた。
剣を取り落としたネオンに、剣王が切っ先を突き付けて笑った。
「技術、瞬発力、動態視力、腕力…。どれもすばらしいけどやっぱり君の強さは腕力だね。でも少しそれに頼りすぎかな?」
剣王は言う。
「腕力だけじゃ倒せないやつもいるよ。君は頭もいいし、センスもいい。それを使わなきゃそんだよ」
いつの間にか人々はネオンとアレイを囲うように丸い輪になっていた。
その人垣が、パンパンパンという拍手の音で割れる。
「…アスター…」
アゲートが音の主を見た。
「アスター、ネオンは僕が倒したよ」
「そうだね」
アスターがアレイに微笑む。
「これで君は『彼女』を越えられるかな?」

アレイの言葉に、アイリスがハッとしたようにアスターを見た。
「なんの話？ウイスタリアが首を傾げる」
「なんでもないわ」
ネオンが言いながらアイリスたちのもとへ戻って来る。
「ネオン、おつかれ。アゲートがお前が剣王に勝っちゃったらどうしようって心配してたよ」
バジルが笑った。
「まさか。あたしはまだ学生なのよ。余興なら他の強い人とやればいいのに、学生を相手に選ぶなんてずるいわ」
言葉とは裏腹にネオンは笑ってアスターとアレイを見た。
「あいつと戦うなんて、いい度胸してる」
「勝っただろ？」
アスターは肩を竦めた。
「リミッターつけてあるからな」
「リミッターがなくったって僕は勝ったよ。それしかないんだ。僕が寧音を吹っ切る方法…。彼女は偉大すぎたから、僕らが彼女を吹っ切るには勝つしかない」
「死人に勝つ…か」
「まだ死んでないよ。…いい加減、死なせてやれよ。君の中の彼女も」
「…」
「じゃないとネオンがかわいそうだ」
「…」

何か話していたアレイとアスターがそろってこちらへやって来る。
「ありがとう、ネオン」
アレイが微笑んで握手を求めてきた。
「こちらこそ」
ネオンは握手に応じる。
「まったく、俺になんの断りもなく…怪我したらどうするんだ？」

アスターがネオンの頭を撫でた。「あの…」
近寄って来た男がおずおずとアレイに声をかける。
「そろそろダンスパーティーを始めてもよろしいでしょうか」

E

―真実の章―

「錦、コレをご覧」
御手洗の声に、錦は目を開けた。
彼が『コレ』と言ったのは、優しげな顔をした少女だった。
「…誰？」
「お前の妹だよ」
御手洗が笑う。
「へぇ？強いの？」
錦の目が興味深そうに少女を捕らえた。
怯えたように首を竦めた少女の代わりに御手洗が答える。
「強いさ。なぁ、闇？」
「やみ…？それ名前？」
「あぁ、いい名前だろ？」
錦は小さく微笑んだ。
「そうだね。よろしく、闇…」

「やっ！！」
セリーズの気合を入れる声と共に、剣の音が響く。
「テルル！右だ」
セリーズの剣を受けたままアゲートがテルルに指示を出す。
「うぅ…」
テルルは朱夏の動きについて行けなくてアゲートに言われた方向へ力任せに剣を振るう。
「そこまで」
隙だらけのセリーズの腕に、朱夏が打ち込んで剣を落とさせたところでアイリスが声を上げた。
「アゲートはセリーズに勝ってるから、引き分けね。二十分休憩！

次のグループ、出なさい」
「…テルル？」
朱夏がテルルに声をかけた。
他の人間たちなら納得するが、相手はテルルだ。こうも簡単に勝てるはずのない相手だ。
いくらなんでも集中力が散漫すぎる。
「どうしたんだ？」
アゲートも不思議に思っていたらしく、心配げにテルルを見ていた。
「なんか…調子悪くて…。でもどこが悪いってわけじゃないの。一応帰ったらアスターに相談してみるわ」
テルルはなんでもないように言った。
「朱夏ー！アゲートとテルルも！早く水飲みに行こうよ」
セリーズが呼ぶ。
さっき試合した四人の中で水分補給が必要なのはセリーズだけだ。
だからアゲートと朱夏は、いらない、と返事をしようとした。
しかしテルルが殊更元気に、今行く、と言いセリーズの方へ走っていったので朱夏とアゲートは顔を見合わせ一つ息を吐くと、仕方なくついて行った。
「テルル、今日は調子悪かった？」
セリーズが首を傾げる。
テルルは眉尻を下げて溜め息を吐く。
「うん、今日は朝ご飯食べれなかったの。アゲートたちが起こしてくれなかったから」
それを聞いてセリーズは笑い、ひどい、と言って背中を叩かれたアゲートは複雑な顔をした。

「裏切り者だよ」
「うらぎりもの？」
闇は知能が赤ん坊並だった。
言葉は正確に発音するがその意味をいちいち教えなければならず、

会話にならない。
「このバカ！いい加減にしろよ！頭どうなってんだ？」
錦はイライラと後頭部をかいた。
「にしき、うらぎりもの？」
「俺じゃないよ！裏切り者はあそこにいる、お前よりバカな連中！」
錦がヒステリックに怒鳴って野外演習中の黒曜たちを見せる。
「ばか…？」
闇もつられるようにそちらを見る。
「そ。親である御手洗博士に従わない故障品。だからさ、バカはさっさと始末するの」
「しまつ…」
闇が、今戦っている黒曜を見つめたまま呟いた。
「潰すってことだよ」
「潰す…クラッシュ？」
「そうだよ。よく知ってんじゃん？」
誉められて闇は錦を見る。
「闇、よく知ってる？」
「あぁ、賢いよ。だからさ、早く力を見せてよ」
錦が強い興味を隠さず闇を見た。
「ちから…みせたら、にしき、うれしい？」
「うれしいよ。御手洗博士もよろこぶ」
「はかせが…」
闇の顔から優しい影が消えた。能面のような無表情で闇は言った。
「よろこぶ…？」
錦はその様子に何故か身震いする自分がおかしくて、小さく笑った。
「にしても、あの人間共はどうしような？」
「にんげん…」
「黒曜たちだけなら、壊すのは余裕だけどさ。人間共と、ヘルデライトのヒューマノイド共が邪魔だよな。数多くて…」
「闇、できる。はかせが、よろこぶなら…」

闇の言葉に錦は溜め息を吐いた。
「あぁ、お利口お利口。でも頭も使えよ？」「あたま…？」
闇が首を傾げる。
「そ。たとえば、奴等に囲まれる。黒曜たちだって故障品とは言えヒューマノイドだろ？その黒曜たちと、ただの人間があれだけの勝負してんだ。…負けたけど」
試合が終わった様子を見て、錦は最後の語を付け足す。
「たぶん黒曜たちもヘルデライトのヒューマノイドたちもリミッターつけてあるんだろうけどな。とは言え、大人数で来られたら厄介だ。こっちはお前がどれだけやれるかわからないし、ただのお荷物かもしれないし…」
錦は黒曜たちを眺めたまま説明する。
「にもつ…ない」
「へ？」
闇の言葉に、錦はそちらを見る。先程と変わらぬ無表情があった。
「にもつなら、すてる…はかせには、必要ないって…」
錦は眉を顰めた。
「それ、博士が言ったの？」
闇は小さく頷いた。
「ふぅん、俺の方がお荷物ってことか？」
言った途端闇の表情が戻る。
「錦、怒ってる？」
「いや、いいよ。じゃぁ俺もそうする」
闇が頷いた。
「正面から行っていいんだな？自信はあるのか？」
「はかせが、よろこぶなら」
錦は溜め息を吐いた。
「…よろこぶよ」
「次、ウイスタリア、黒曜、アゲート、テルル、入って」

アイリスが呼ぶとウイスタリアと黒曜は生真面目に返事をして前に出る。
「黒曜の相手は俺な。テルルはウィスタ。大丈夫か？」
両サイドをネオンと白夜に挟まれたテルルにアゲートが問う。テルルは気遣わしげなネオンと白夜に微笑んでからアゲートに頷いた。
その時、近くの木の枝が大破した。
「やぁ！」
同時に声がする。
「日頃は音にも聞きつらん、今は目にも見たまえ！我こそはブッ…！？」
「錦、うるさい」
枝を大破した武器であろう、大型の銃を構え、古風に名乗りを揚げようとした錦を後ろから飛び下りてきた闇が潰す。
「おっまえなぁ…」
「すきだらけ。バカ」
闇に言われて、錦はぶちぶちと文句を言う。
「まったく、戦い前に名乗りを揚げないなんて、日本人じゃないよ」
ネオンたちはポカンとして彼らを見る。
「まぁいいや。名乗らなくても知ってるよね、そこの三人は。…ああそれと、ミス・ガレナも？」
「…錦…」
ネオンが呟いた。
「相変わらず奇襲のできないやつだな、錦！」
朱夏が口の端だけで笑った。アイリスはハッとして、生徒たちに避難を命じた。
「ああ、逃げてくれるなら早くしてよ！俺たちはそこの三人を壊したいだけなんだ！！」
錦が朱夏に照準を合わせる。
「朱夏！」
セリーズが叫ぶ。

朱夏は彼女を後ろに押しやる。
「アイリスに従って早く逃げろ！」
「なに？朱夏？いつからそんな人間の女なんか庇うようになったの？」
楽しそうな錦の銃が朱夏から外れてセリーズに向いた。
「…え？」
ネオンがアゲートに指示を送るより早く、テルルが駆け出した。
「セリーズ！」
錦が引き金を引く。
朱夏がとっさにセリーズを庇い、錦が攻撃している隙に後ろに回ったテルルが錦と闇の背中に拳を突き付ける。
「動かないでっ！」
テルルは叫んで、撃たれた友人を見やる。
体を強化させて砲撃を受けた朱夏は、枝を大破させるほどの衝撃にもかかわらず無傷だった。
ホッとしたのと同時にセリーズの驚愕の表情が読み取れて、腹の底が冷える感覚に陥る。
「ハハッ！見たかよ人間ども！！これが俺たちの…ヒューマノイドの力だよっ！」
錦が笑った。
「この女の異常に早い身のこなしも、朱夏のタフさも、人間じゃありえないだろ？」
愕然とする六体のヒューマノイドを、人間たちが同じく愕然として見る。
歯を噛み締めて錦を睨むテルルを身を捩った闇が殴り飛ばした。
「がぁっ！？」
テルルが吹っ飛ばされてガシャンと音を立てて落ちる。
ネオンたちはもちろん、錦まで驚いてそちらを見た。
無表情の少女が、銃をテルルに向ける。
テルルの殴られた部位は人工皮膚も肉も抉れて、機械の骨組みを人

間たちに晒している。
「アゲート、リミッターはずした？」
ネオンが静かに問う。
「いいのか？」
「今更…バレたって構わないわよ！」
叫ぶと同時にネオンが闇に殴りかかった。
「ミス・ガレナ、闇は御手洗博士の自信作なんだ。ヘルデライトのヒューマノイドでも敵わないよ」
錦が微笑んでネオンに銃を向けた。
その錦を黒曜が蹴り飛ばす。
「朱夏！ネオンの援護を！白夜！怯えてる暇はない！テルルを頼みます！」
「アゲートはみんなの退路を確保して！アイリス！みんなを連れて早く逃げて」
黒曜とネオンが指示を出しながら戦う。
ネオンと闇の攻防に加わろうとした朱夏を、ネオンが制する。
「朱夏は黒曜の方に。ペアを組むなら慣れた者同士がいいわ」
「確かに、黒曜一人で俺を倒せるわけないね、二人でも無理だけど！でもミス・ガレナ、君は一人で未知数の闇と戦うつもりか？しかも素手で！？」
「あたしに素手も武器もないわ！錦！あたしはアスターの作ったヒューマノイドじゃないのよ！未知数なのはあたしも同じ！」
ネオンは闇を追い詰め、木の幹に打ち付ける。
「知ってた？あたしだけリミッターが二段階なの。アスターの付けたものと、寧音がつけたもの…」
闇はネオンを睨む。ネオンも闇を睨み付けた。
「よくもテルルを」
テルルの様子をみた白夜が、完全にブラックアウトしているが核に異常はないことを報告して、アゲートと共に人間たちの退路確保に向かう。

「関係ないものを壊したりしない。私たちの目的は裏切り者をクラッシュすること…」
闇が鼻で笑う。
「だけど邪魔するならあなたもクラッシュする！」
闇の体が変形していく。
露になる、武器を満載したボディ。
少女の体を武器が突き破って出て来たようなおぞましい姿。
「邪魔、しないで…」

「すげ…」
錦が呟いた。
「なんで君が驚くんですか？」
黒曜が錦の銃を叩き落として遠くに蹴る。
「言っただろ？あいつは未知数だって…」
錦は仕方なく飛び上がり、蹴り付ける。
「お前すら知らない。つまりこれがあの子の初陣か？」
朱夏が受け止めて投げ飛ばした。
「お前ら、肉弾戦の訓練してた？」
錦が舌打ちする。
「騎士科はなんでもできなきゃダメなんですよ」
「生徒は訓練以外で武器は持てないしな」
黒曜と朱夏が笑った。
「御手洗のヒューマノイドは武器使いが巧みだ。そしてヘルデライトのヒューマノイドは肉弾戦。俺たちは両方身につけた」
「なるほどな」
錦が笑い、そして体を横にずらした。
「朱夏！避けて！！」
ネオンの声が飛ぶ。同時に一筋の光線が朱夏を貫いた。
「…うらぎりもの…」
闇が呟いた。

朱夏は頽れ、動かない。
「…朱夏が一撃で…」
黒曜は朱夏を確かめ、闇を睨む。
「余所見するなよ黒曜ぉ！！」
錦が黒曜の頭を蹴り付ける。
黒曜は不意打ちに堪え切れず土の上に転がった。
その頭を錦が踏み付ける。
「お前も終わりだ…」
「…錦…」
「お前が悪いんだよ。俺と博士を裏切ったから。…ばいばい」
錦の足に力が籠る。黒曜は目を閉じた。
「ごめんなさい、錦。さよなら」
錦の頭を砲撃が撃ち抜いた。
「我々は武器使いも巧みだと、朱夏が言ったでしょう？」
吹っ飛ばされた錦を見ながら黒曜が立ち上がり、銃を構えたまま白夜が朱夏に近付く。
「武器を借りられたんですね？」
白夜は黒曜に頷いて朱夏の様子を見る。
「核は壊れてないわ」
「ええ、きれいに胸を貫いたから、頭に異常はないはずです。彼女は自分たちの核がどこにあるのか知らないのかもしれませんね」
黒曜もゆっくり朱夏に近付き、アゲートが駆け寄る。
「ネオンは！？」
アゲートの言葉に二人は慌ててネオンを見る。
片腕を無くしたネオンの右耳を、闇の砲撃が吹き飛ばした。
彼らの核は頭にある。
「ネオン！！」
アゲートが叫んだ。
ネオンの虚ろな目が彼らと、倒れている錦を映し、ホッとしたよう

に光を取り戻す。
その瞬間、ネオンの体を光が刺し貫いた。
「にし…き…」
闇が感情を宿さない目で錦を映し、すぐに興味を失ってネオンを見る。
闇の武器もいくつか壊れて取れかけたり銃口が潰れてねじ曲がったりしている。
白夜が闇の頭に照準を合わせるが、二人の動きが早いため、ともすればネオンを撃ってしまいそうになる。
アゲートが闇の後ろに回る。
「ダメ！アゲート！！この子、死角がない！」
ネオンの叫びと同時にアゲートの頭が吹き飛ばされた。
「アゲートっ！！」
ネオンがこれ以上ないほど悲痛な叫びを上げ、闇の頭を殴り飛ばす。
闇はよろめいたが持ち堪え、銃の一つをネオンに向ける。
「アゲートが…」
駆け寄ろうとする黒曜を白夜が引き止める。
「もうすぐ、軍がくる…」
目を逸らして言う白夜を黒曜は見つめる。
「だから俺たちのために傷付く仲間を見捨てろと？」
冷たい黒曜の声に白夜が震える。
「アゲートは、完全に核を撃たれた…」
「だから…見捨てろと？」
「だって…」
言いかけた白夜の後ろで、野外演習場の四方の灰色のシャッターが閉められた。
「…軍は、来ないらしいですよ？」
黒曜の言葉を合図に白夜はへたりこんだ。
「ヘルデライト博士も、剣王も、私たちを見捨てたのか？」
小さく呟いた白夜を残し、黒曜は白夜の銃を携えてアゲートに近寄

った。
白夜の言う通り、アゲートの核は頭ごと壊れていた。
黒曜は闇に向けて銃を構える。
闇の武器を一つずつ撃ち壊し、アゲートの近くに落ちていた彼の銃をネオンに投げて呼びかける。
「俺が気を引きます！ネオンは頭に集中して！」
ネオンは頷き、銃を受け取った。
飛び上がって上空から闇を狙い、肩と足を撃ち抜くが頭には当たらない。
地面に着地したネオンを狙った銃口を黒曜が潰した。
その時、闇の上空を砲弾が霞めた。
見ると白夜が錦の大型の銃を構えている。
「もう死んでぇっ！！」
白夜は叫び、闇のボディに撃ち込んだ。
「白夜！自棄になるな！よく狙ってください！！」
黒曜が言い、ネオンが笑う。
「いいわ。めちゃくちゃに撃って。その銃ならどこに当たっても大ダメージよ」
ネオンは銃を捨てて踏み込み、大方の武器を壊された闇を捕らえる。
「あたしに当てないでね！」
ネオンの叫びと共に放たれた銃撃が闇の頭を吹き飛ばす直前、闇の仕込みの剣がネオンの腹を貫いた。
「はっ…」
ネオンがニヤリと口角を上げた。
「どうしてわかったの？あたしの核がここにあるって…」
答える前に闇はクラッシュされた。
ネオンは膝をついた姿勢のまま動かなくなった。

しばらくしてシャッターが開き、ヘルデライトのラボへ六体のヒューマノイドが運ばれた。

「ネオンのメモリーと核は別々にしてあったんだ。メモリーは頭に、核は腹に…」
数日後、比較的軽傷で、先に修理を終えた二体にアスターは言った。
「ネオンのメモリーがあれば、アゲートのメモリーも復元できる。同じ人格の別人をもう一度作ることができる」
テルルと朱夏は修理を終えて、メンテナンスベッドに入っている。
ネオンとアゲートのボディとアゲートのメモリーは完璧に復元され、後は新しい核を入れるだけとなっている。
「アゲートはネオンを元に作ったんだ。核はいじれないから真似のしようがなかったが、それ以外の作りはすべてネオンと同じだ」
「…」
「…」
黒曜も白夜も黙って座っている。
アスターは人形に語っているような気になったが、彼らが確かに人形であることに思い至る。
「だけど核だけであんなに違うんだ。二つもリミッターをつけて、それでもリミッター一つのお前たちより強いくらいにな」
やはり二人は喋らない。
「…この核を入れたら、ネオンは最強のヒューマノイドじゃなくなるかもしれない…」
「…」
「…それでも俺たちは充分強い。それに学習もできる。最強である必要などないでしょう？まだ学生なんですから。それより早く、ネオンとアゲートを起こしてあげてください」
アスターは小さく笑う。
「すまない」
「なにを謝るの？」
白夜が震える声で問う。
「…シャッター、俺が下ろせと指示した。中にいるのは人間じゃないから、締め込んでしまえ、と…」

白夜はアスターと目を合わせない。
かわりに黒曜がアスターを見た。
「当然です。人間たちを守るために俺たちは造られたんですから。それなのに今回は俺たちのせいで騎士科の学生を危険に晒しました」
「…アイリスが、騎士科の学生たちにお前たちの事情をすべて話した」
黒曜は俯く。
「話さなくったって、みんなもう見ちゃったわ。人間じゃありえない私たちの姿…」
テルルがメンテナンスベッドから出て来て言う。
朱夏もゆっくりと出て来た。
「ひどい目に…」
言いかけた朱夏とテルルを白夜が抱き締めた。
「ネオンと、アゲートが…っ」
白夜の涙声に、朱夏は俯き、テルルは二人のボディを見る。
「良かった。メモリーとまったく違わない。完璧な二人のボディ…。さすがはアスターね」
「アゲートのメモリーも、お前とネオンのメモリーから完璧に再現した」
アスターがテルルの頭を撫でる。
「良かった…」
「ただしネオンのパワーは落ちるだろう。俺の作った核じゃ、寧音の作った核には敵わない」
テルルが笑う。
「その寧音さんの核ね、学習能力はないみたいよ?」
アスターが目を見開く。
「剣王にあれだけ言われたのに、ネオンは気を抜くとすぐに力任せの戦い方に戻るの。アスターの核は私たちに学習する力を与えてくれたでしょう?私たちに可能性を与えてくれたでしょう?」
アスターはネオンの頬を撫でた。

「ネオンはしあわせ。寧音さんの作った強いボディに、アスターの可能性が入るの。きっとすぐに前のネオンを超えるわ」
黒曜が微笑んだ。
「俺たちも負けませんけどね」
「そうよ、もうネオンばかりに最強なんて言わせないわ。これで一番のお姉ちゃんは私になったんだから！」
テルルが笑うと、白夜も笑う。
朱夏と黒曜も目を合わせて小さく笑いあった。
「テルルは楽天家だな」
朱夏に小突かれて膨れるテルルを見て、やっとアスターが笑った。

―再出発の章―

俺にはずっと憧れてた人がいた。
今思えばその感情は尊敬だった。
強くて、まっすぐなその人を尊敬して、認められたかった。
だけど尊敬ってのは、恋に少し似ていて、その人の近くにいるとうれしくて、でもその人がこちらを見ないことがさみしくもあって、憧れれば憧れるほど苦しくて…。
その恋に似た感情に、俺は焦がれた。
その気持ちを伝えられないまま…、恋でないと気付いて尚、昇華することもできないまま、ジクジクと溜め込まれた思いは、心のそこで凝って、こびりついて固まって、もうすぐ取れなくなる。
その憧れの人に、ちょっかいを出す男がいた。
俺より大人で、よその子どもを六人も養えるほどのお金持ち。その子どもたちは俺の同期生で、その中の、一番特別っぽい女の子は、すこしあの人に似ていた。
その男と、子どもたちの秘密を俺に伝えたのは彼女だった。
騎士科の人間しかしらない事実を、騎士科を出た俺にまで話して、アイリスは珍しくうなだれた。
「どうすればいいかしら…」
そんなことを言われても、俺だって戸惑っていた。ずっと人間だと思っていた友達が人形だったと知ったのだから。
それでも、彼らは俺の友達だと、やはり思えるので、他の仲間たちも同じだと思って、アイリスにそう伝えた。
「みんなをちゃんと守ったってのがネオンたちらしいなぁ」
笑った俺に、彼女も笑った。
俺はそれだけで少し嬉しくて、彼女が俺に悩みを聞かせてくれただけで本当に嬉しかった。俺は以前は彼女に強引に迫ってしまったことがあり、どこか警戒されているのを知っていたから。

ただ心配なのはネオンたちが事件の後から登校していないということだった。
剣王の命で事件のことは誰にも言ってはいけないことになっている。
アイリスは直接、剣王に話をし、六人と友達の俺には話をしたいと申し出てくれたらしい。
騎士科の仲間たちは無傷で、心の方も落ち着きを取り戻しつつある。
それに六人は何も悪くないんだから学校に出て来ることはできるのだ。なのに登校しないのは、やはり隠し事をしていたことを気に病んでいるのか。
しかしこの隠し事はアイリスも承知していたらしいし、剣王や軍の中心部まで一枚噛んでいたらしいのだから、見習いとはいえ騎士たる者、剣王や軍、それに上官であるアイリスに逆らってまで友達を責めるなんてできない。いや、騎士でなくとも、仲間たちはネオンたちを責めたりしないだろう。だからネオンたちは気にすることはないのだ。
「今日、学校終わったらヘルデライトさんのラボに行ってみるよ。みんなが行くより俺が行った方がいいだろ？」
「…ありがとう」
彼女の素直な言葉に、俺は微笑んだ。

「あたしの魅力を３０字以内で答えて！」
ウイスタリアに迫られ、アゲートは思わず後退さった。
それからしばらく考える。
「…」
「…」
ウイスタリアも黙って待つ。
「…」
「ふぅ…」
しばらく沈黙が続き、やがてウイスタリアが溜め息を吐いた。

「えっと…」
アゲートが頬を掻く。
「やっぱり他に好きな人がいる男に聞いてもダメね」
「は？」
アゲートが素頓狂な声を上げた。
「ネオンでしょ？」
「え！？」
顔を真っ赤にするアゲートを黒曜がからかう。
「そうだったんですか？アゲート！？」
ウイスタリアもからかうような口調で、しかしどこか寂しげに言う。
「他の女はカボチャにしか見えないって？」
「…そんなこと…」
困るアゲートにウイスタリアは笑った。
「いいよ、もう…ごめんね」
「ウィスタは優しいよ」
アゲートが小さく呟く。
「…」
アゲートは続けた。
「…優しいし心が強い。だから側にいると安心する。きっとバジルもそう思ってる」
「…ありがとう。でもあたしは…、優しいとか、安心とか…そういう、なんていうか…お母さんみたいなのじゃないの」
ウイスタリアは目を伏せる。
「…」
「女としての魅力が欲しいの。包み込む愛には疲れたの。あたしが包まれたいの。抱き締めてほしいの…」
「ウィスタ…」
アゲートが名を呼び、しかし続ける言葉がなくて黙る。
「強くいるのはもう嫌なの。弱くなりたい。ただ守られたい」
「守られたい、か…」

朱夏が呟いた。
「あたしは、…強くも弱くもなれないまま、恋が死ぬのを待つのは嫌なのよ」
「俺にとってウィスタは間違いなく守るべき対象ですよ？」
黒曜が首を傾げる。
「ばか、心の問題だよ。力だけならベリルだってウィスタより強いぜ？」
「でもウィスタは心が強いから頼れない。力もあるから抱き締めあうよりも背中合わせを選ぶ…」
朱夏が黒曜をはたき、白夜がしみじみと言った。
「頼りたいけど、甘えはキライなのよね…」
「白夜もテルルも強いのに甘え上手よね？」
言われて二人は顔を見合わせる。
「私たちは、三番目に造られたから、先の二人を頼る者ってインプットしちゃってるの」
「末っ子って甘えんぼが多いだろう？だから博士たちは私たちをそういう性格にしたんだ」
テルルと白夜の言葉にウイスタリアはなるほど、と頷いた。それからメンテナンスベッドを眺める。
「ネオンはまだ目覚めないの？」
「寧音さんの作ったメモリーとアスターの作った核が拒否反応起こしてるんだ」
アゲートが答えた。
「心配そうな顔」
朱夏が笑った。
「アゲートのキスで目覚めるかもしれませんよ？」
黒曜も笑う。
アゲートが怒ろうとした時、玄関のブザーが鳴った。
「客か？」
核の改良に没頭していたアスターが顔を上げる。

「…バジルだ」
アゲートが壁のモニターを見て言う。
「え！？」
ウイスタリアがモニターに飛び付いた。
「なんで？」
ウイスタリアがオロオロと周りを見る。
「わかんない。…いらっしゃい、バジル」
テルルがバジルに声をかけた。
「博士なら今、手が放せないの…」
『テルル、元気そうだね。学校に来てないって、アイリスが心配してたから様子を見に来たんだ』
ウイスタリアの顔色が変わった。
テルルたちは困ったように顔を見合わせる。
「入ってもらえ。バジルには事情を全部話すってアイリスが言ってたから、聞いた上で来たんだろ？」
『聞きました。ヘルデライトさんの初恋の相手のことも』
バジルが笑う。
「…帰らすぞ」
アスターが低く唸った。
「バジル、今開けるから待ってね」
テルルが言い、しばらくしてバジルが現れた。
「…ウィスタ…」
バジルはウイスタリアの姿を見て少なからず驚いたようだ。
「久しぶり…」
ウイスタリアは努めて冷静に挨拶した。
「…ああ」
「ホントに久しぶりね、バジル。バジルがいなくなって、私アゲートと組むはめになったのよ！？」
テルルがお茶を淹れながら言う。
「そうなの？最強コンビじゃない」

「ぜんぜんダメ。こいついざと言うときに故障起こすし。この間も…」
言いかけてアゲートは黙る。
「この間、大変だったみたいだね。テルルは調子悪かったんだ」
「…調子よくてもやられてたわ」
テルルが悔しげに言う。
「彼らは？はじめて会うけど…」
バジルがテルルの額を軽く撫でてから黒曜たちを見る。
「新しい仲間。私たちと同じよ」
「話だけ知ってる。紹介してよ」
「漆原黒曜、南手朱夏、雪絹白夜。あなたの変わりに入った騎士科の生徒よ」
ウイスタリアが言い、黒曜たちを見る。
「この人がバジル・エレスチャル。元・騎士科で、今は銃士科よ」
黒曜が頷く。
「俺たちも話は聞いてますよ。いろいろと、ね」
「黒曜！」
ウイスタリアが怒り、その様子に何か察したらしいバジルが話を変える。
「お前たち、元気そうなのになんで学校来ないんだ？…ネオンは？」
バジルが不在者の所在を問う。
白夜が赤い液体に満たされたメンテナンスベッドを指差した。
中にはネオンが、標本か何かのような美しさで眠っている。
「目覚めないんです。だから俺たちは彼女が起きるのを待ってる」
「一緒に学校行くのよ」
テルルが微笑んだ。
「ってかアゲートが、ネオンが目覚めたとき、自分は学校行ってた、なんてのが嫌なんだよ」
朱夏の言葉にバジルは首を傾げたがつっこんで聞かなかった。
「なんでアイリスに連絡しないんだ？ウィスタも心配して来たんだ

ろ？」
バジルに問われて、ウイスタリアが頷く。
「…みんなが心配してくれてるって思わなかったの」
テルルが俯いて言った。
「怒るわよ」
ウイスタリアに頭を軽く押されてよろめいたテルルは、ごめん、と笑った。
その笑顔がすぐに泣き顔になる。
「馬鹿ね、みんな。あたしたちが今更、あんたたちを嫌うわけないでしょ？」
ウイスタリアは言いながら、優しい目で一同を睨む。
「セリーズが朱夏を心配してるのよ？自分を守ろうとして撃たれたでしょ？無傷に見えたけど、本当は怪我してたんじゃないかって…」
朱夏が困ったように笑った。
「庇ったんじゃないさ。元々俺たちの敵なんだから。ってか、あいつは、セリーズを狙えば俺を確実に撃てるって分かっててやったんだよ」
「朱夏を狙ったのでは避けるかもしれませんからね」
黒曜が言い、俯いた。
「本当にすみません。ペアを組んでいるのに何も連絡せず…」
「本当よ。あんたたちがどれだけ強くても、ペアで戦う以上訓練は怠っちゃダメよ」
久しぶりに聞いたウイスタリアの説教に、バジルが少し笑った。
「相変わらずだな、ウィスタは」
ウイスタリアは半眼になってバジルを睨む。
「相変わらずなのはあんたよ」
「なんだよ？」
バジルが首を傾げる。
「わからないならいいわ。ヘルデライトさんの仕事の邪魔しちゃ悪いし、もう帰るわよ」

立ち上がってアスターとアゲートたちに手を振り、歩き出すウイスタリアを慌てたバジルが、挨拶もそこそこに追いかける。
残された一同は顔を見合わせ、少し笑った。

「ウィスタ？何怒ってんだよ？」
「別に…」
「別にじゃないだろ？こっち向けよ！」
早足で歩こうとするウイスタリアの手を、バジルがとる。
「何よ？ついて来るの？」
バジルの方を振り向き、睨み付けて、ウイスタリアは後ろの建物を顎で示した。
「…女子寮」
寮官が睨んでいた。
アハハハハ
何か言いかけたバジルの後ろで笑い声が響く。
「いいね、男の子！ナイス・ボケ」
バジルが怪訝そうにそちらを見て、ウイスタリアもその肩越しに声の主を見た。
「ねえ、君たちさぁ、何科？ボクたち今度新設される科の一期生になるんだけどさ？ね、ココ？」
一方的に喋る少女の隣りで、少女とそっくりの少女が頷く。
「ねえ、何科？」
再度聞かれて、バジルが名乗る。
「…銃士科のバジル・エレスチャルだよ。今日が入寮？寮官にカードキーもらっておいでよ」
「ありがとぉ。ねえ、女の子は？」
ウイスタリアは少し警戒しながら名乗る。
「騎士科のウイスタリア・フェナス。あなたは？」
「ボクはトト・キャロル。こっちが双子の妹で、ココ・キャロル」
ココがペコリと頭を下げた。

「ねえ、ウイスタリア。君の科にさ、化け物がいるだろ？」
ウイスタリアとバジルが顔を見合わせる。
「なんのこと？」
惚けないでよ、とトトは笑った。
「銃を食らっても死なない、側にいなくても通信で会話し合うやつらがさ？ヒューマノイドっての？人間の戦いを汚す化け物…」
ウイスタリアとバジルの顔色が変わった。
「…君、どこでそれを？」
キャハハ、とトトは甲高く笑う。
「言っておいてよ。ボクらが最強だって。ボクらの科はさ、特別なやつしか入れないから、まだボクたち二人しかいないんだけど、騎士科とは合同訓練が多くなるから覚えておいてよ。ＰＫ科のトトとココってね」
言い捨てて、双子は立ち去った。

ネオンはゆっくり目を開いた。メンテナンスベッドに満たされた液体が退いて行き、完全になくなってからドアが開く。
「…ネオン、悪かったな」
アスターに言われてネオンは首を振るが、何を言うべきか分からなくて口を噤み、アスターに抱き付いた。
ラボは薄暗く、他のヒューマノイドたちは眠りについている。
「うれしいのよ」
ネオンが夜を醒ますのを恐れるように囁く。
「これでちゃんと、アスターの子に生まれ変われた。あたしはもう、あなたを縛る寧音の亡霊じゃない」
アスターはネオンの背中を撫でた。
「ネオン…」
ネオンはアスターの首に縋りつき、背伸びをして耳元に囁く。
「だから、アゲートたちと会う前のメモリーを…、」

ぜんぶ消して…、アスターは驚いたようにネオンを見つめる。
「お願い、アスター」
ネオンが首の後ろを開いてコードを取り出し、コンピュータに接続する。
アスターがキーボードに指を添えた。
「さよなら、アスター…」
アスターの指が動き、キーボードを叩く。
「さようなら、寧音…」
ピィーンと、糸を弾くような音の後、ネオンはブラックアウトした。
そのネオンをベッドに戻し、アスターは少し寂しげに笑った。
「ありがとう…」

―再出発の章―（後書き）

闇も錦もお気に入りだったので、前回二人を壊してしまったのはとても悲しかったけれど、おかげで今回、ネオンとアスターが先に進むことが出来ました。
新キャラも出てきました。

今後はネオンらと共に新キャラにもご注目ください。

さてさて、この章は別名『恋の章』でして、進展も再出発も後退もしないウィスタとバジルの関係も、いい加減なんとかしてあげたいものです。
秋茄子は、恋愛は好きだけど苦手っていうかわいそうなやつですが、がんばってなんとか決着つけさしますので見守ってやってください。

―『最強』の章―

「ＰＫ科？」
ネオンは首を傾げる。
「最強は自分たちだって言ってたわよ」
「へぇ…」
ネオンは笑う。
「だって、黒曜？」
「別にいいんじゃないですか？敵じゃないなら心強いじゃないですか」
黒曜は言い、ベリルを見る。
「ところでさっきから、ベリルは何を怒ってるんです？」
ベリルはさっきから話に入って来ない。
「お前には関係ない」
ベリルにそう突き放されて、黒曜は肩を竦めた。
「ネオンとベリルは騎士科に入ったときからずっとペア組んでるのに、ヒューマノイドのことなんて聞いたことなかったから拗ねてるのよ」
「っこのバカウィスタ！デタラメ言うなよ！」
ベリルが慌てたように言う。
「ちゃんと謝ったのに」
言って、ネオンはベリルの赤い頬を見る。
「うるさい！そんなこと怒ってないって言ってるだろ？」
言って、ベリルは立ち上がり、教室を出ようとする。
「どこ行くんですか？」黒曜が問うと、ベリルはイライラと返事する。
「訓練室！ネオンも来いよ！無断で二週間も休みやがって」
「それも謝ったじゃない」
ネオンは苦笑しながら立ち上がった。

「騎士が無断欠勤して、謝って済むと思うのか！？」
ベリルはさも偉そうに正論を言い、ネオンを睨む。
「はいはい」
「俺たちも行こうぜ」
ネオンが二回返事をして部屋を出るのを見て、テルルを促しアゲートが立ち上がる。白夜やセリーズ、シアルと一緒にお菓子を食べていたテルルは不満げに声を上げた。
「えー？なんで？」
「俺は核を入れ替えたばかりだからだよ、今日からみんなとの訓練に合流するのに、前と同じくらい動けないと困るだろ？」
「ネオンとベリルが気になるだけのくせに」
テルルが舌を出す。
「なぁに、それ？どういうこと？」
セリーズが食いついてきたので、アゲートはなんでもない、と言い張って、テルルを連れてネオンたちの後を追った。
「ネオンは大変だな」
朱夏が笑って、白夜の手元のクッキーを取った。抗議の声を上げる白夜に自分のビスケットを渡して、シアルが宥めた。
「コレうまい、手作り？」
クッキーを食べてしまった朱夏が言う。
「僕が作ったんだよ。味覚もあるんだ？」
シアルが首を傾げる。
「俺はこのくらいの甘さが好きな設定になってる」
朱夏が言って、もう一枚クッキーを取った。
「じゃあ設定変えたらなんでも食べれるんじゃない」
ウイスタリアが笑う。
「簡単に言わないでくださいよ。核に組み込まれたプログラムを簡単に変えたりできません」
「核をいじるってこと自体、すごく危険なことなんだ」
白夜が言い、ビスケットをもう一枚食べた。

「へぇ…あ、白夜、ビスケット気に入った？」
三枚目に手を伸ばす白夜に、シアルが微笑んだ。
「ね、私のマフィンも食べて」
「お、サンキュー」
セリーズに勧められ、朱夏が一つとる。
「僕もいいですか？」
「みんな、ほどほどにしないとお昼食べられなくなるわよ？」
黒曜までうれしそうに手を出すのを見て、ウイスタリアが笑う。
「はぁい」
セリーズが元気に返事しながら、クッキーを一枚食べた。

テルルがネオンの前で蹴りを寸止めする。
ネオンも腕を突き出したが足と腕では届かない。
「テルルの勝ちー」
アゲートが勝敗を告げる。
パンパンパン…
乾いた拍手が聞こえた。
「あんたがネオンだろ？最強のヒューマノイドなんて言っても大したことないんだ？」
嘲笑う声に、ネオンは眉を寄せる。
「何？」
「ネオンは強いわよ！今だって何回かやって、やっととれたんだから」
テルルが牙を剥く。
「何？こいつら…。ここは騎士科の訓練室だぜ？」
休憩していたベリルとアゲートが近付いて来る。
「悪いけどちょっと使わせてよ。よ。ボクたちの科はまだ新設だからさ、専用訓練室ないんだよ」
乱入者が微笑んだ。

「…もしかして、ＰＫ科？…えっと確かトトとココ？」
アゲートが首を傾げる。
「そ。どの科もさ、新設だと思って訓練室貸してくれないの。使ってないくせにさ」
「その横柄な態度で貸せって言ったんじゃないの？」
ネオンに言われて、トトは笑う。
「他の科のやつらにはちゃんと頼んだよ。あんたたちは特別」
「なんでだよ？」
ベリルが不機嫌に問う。
「ボクたちは、戦場において騎士科に、…ヒューマノイドに代わって戦いの中心となるために学校に入れられたの。それに、騎士科なんて、親がエリートって連中しかいない、ただの金持ち集団だろ？気に入らないよ」
「なんだと？」
ベリルが声を荒げて掴みかかろうとするのを、ネオンが止める。
「ベリル、ダメだよ！他の科の人とケンカなんてしたら」
ベリルがネオンを睨む。
「お前、バカにされて悔しくないわけ？」
「悔しいなんて感情ないだろ？そこの三体はヒューマノイドなんだから」
「なんだと？」
気色ばむベリルを抑える手を放して、ネオンはトトを見る。
「ヒューマノイドのこと、誰から聞いたの？」
トトはニヤリと笑った。
「…ドクター・御手洗…」
ネオンたちは目を見開く！
「御手洗の仲間！？」
「違うよ」
顔色を変えたネオンに、満足そうにトトは言う。
「あんたたちが寝てる間に、ボクたちが奴を始末してきたんだよ」

「しま、つ…？」
ネオンが首を傾げる。
「あんたたち、ヒューマノイドだけなら、いくら壊されてもいいけどさ、他の生徒まで危険に晒されちゃたまんないの！だからボクたちが命令受けて、始末したんだ」
トトは笑った。
「あの御手洗を？」
「ヒューマノイドが一体もない状態じゃ、御手洗なんてただの人だよ？一般人相手にちまちまやってるヒマも、ないでしょ？軍人さんには」
ココがトトの服の裾を引っ張る。
「おしゃべりしてる内に授業が始まっちゃう。ボクらの力は今度見せることにするよ」
トトは笑って言い、ココと一緒に訓練室を後にした。

二人が去った後の訓練室で、ベリルは首を傾げる。
「何ショック受けてんだよ？お前らは」
テルルがベリルを見る。
「私たちはいいの。御手洗は敵以外のなんでもないんだから…」
テルルはネオンにすがるようにその腕にすり寄った。
「でも、黒曜たちは複雑だよ。自分たちを作ったマスターだもん。どうせなら自分たちが…、って思ってたはずだ」
「黙ってりゃ、わかんねーよ。俺たちも早く教室戻ろうぜ」
アゲートが言って、教室の出口へ向かい、ベリルがネオンとテルルの背中を押す。
「アゲートの言う通りだよ。ほら、俺たちも行かなきゃ、遅れるぞ」
ネオンとテルルは頷き、出口へ向かった。

e

―別れの序章―

「訓練室へ」
ウイスタリアの号令で一同は教室を出る。
「次って座学じゃなかった？応急医学の」
テルルが首を傾げる。
「実技なのかな？」
セリーズが答えた。
「何の知識もなしに？医学なのに」
ネオンが不思議そうに言う。
「あ…」
真っ先に訓練室へ辿り着いたアゲートがドアを開けた状態で止まる。
「何？…誰？」
戸口で立ち止まったアゲートの肩越しにシアルが中を覗き込んだ。
「ＰＫ科」アゲートが呟いた。
「あの子たちが？」
シアルが言いながらアゲートの背中を室の中に押し入れ、自分も中に入る。
朱夏と白夜が興味深そうに、先に来ていたアイリスの隣りに立つ少女たちを見る。
黒曜は急に機嫌が悪くなったネオンの傍を離れて、アゲートに近寄る。
「あの子たちがＰＫ科の？」
「トトとココだ」
アゲートも不機嫌に言う。
二人を知らない黒曜たちやセリーズとシアルにも不機嫌が伝染しそうに空気が悪い。
「ねー、ネオンはぁ？」
ＰＫ科の一人、恐らくトトが首を傾げる。

その態度は確かに傲慢そうで、性格が良さそうには見えない。
だが黒曜としては話したこともない人間を決め付けたくはない。
「何よ？」
ネオンが前に出るのを、見守った。
「あー、ネオン！久しぶり」
昨日会ったばかりだけど、とトトは笑う。
相変わらずココは静かにトトの隣りに立っているだけだ。
「整列！」
アイリスが号令をかけ、騎士科の一同は渋々足を踏み出し、アイリスの前に立った。
「紹介します。今度新設されたＰＫ科のトト・キャロルとココ・キャロル。ＰＫ科と騎士科は合同授業が多くなるからよろしくね」
「お願いしまーす」
トトがひらひらと手を振った。
「…お願いします」

アイリスが説明するのを、ネオンは眉を寄せて聞いている。
「…と言うわけでＰＫ科は、ＰＫ、つまり超能力という特殊能力を持つ生徒を集める予定です。ＰＫと魔導の違いは、科学的に分類できるかできないかよ」
「…」
騎士科は首を傾げて聞くだけだ。
「このキャロル姉妹は、テレパシー能力をもっているわ。無線機や魔導による風送りなど、戦場において、隔距離間での意思疎通の方法はいろいろあるけれど、ＰＫによるテレパシーの長所は、通信を傍受されないってことと、電波障害による通信不通の心配がないことね」
「そして短所はボクたち二人の間でしか通信できないこと…。ほかの能力者がいても、ボクたちの念波はボクたちの間でしかやり取りできない」

トトが口を挟んだ。
「じゃあ使えないじゃない？」
ネオンが声を上げる。
「それをこれから見せます。ネオン・ガレナ、トト・キャロル、前へ」
言われてネオンは不審そうにトトを見る。
トトはそんなネオンににっこり微笑んだ。
「それから漆原黒曜、前へ。黒曜対ネオン、トトペアで試合をします」
「ウィスタとベリルは？」
ネオンがアイリスを見上げる。
「一対二の試合形式を行うので、今回はトトと組んでちょうだい。ちなみにトトは戦わないから、ネオンはトトを守りながら戦うこと。いいわね？」
ネオンは憮然とトトを睨む。
「よろしく、ネオン」

訓練室と違い、障害物の多い野外訓練場の、中でも特に障害物が多く設置されているエリアに、声が響く。
「ネオン、右だよ！」
「なんで分かるのよ！？」
ネオンの疑問の通り、二人の少女の周りは壁に囲まれていて周囲が見えない状態だ。
「アイリス先生からの指示だよ」
ネオンは舌打ちをして、右の壁の隙間から身を踊らせる。
「いた！」
言うが早いか、ネオンは黒曜を後ろから襲い、拳を寸止めした所でトトがストップをかける。
「そこまで！ネオン、黒曜、教室に戻るよ」

ネオンは黒曜から離れて、トトを見る。「訓練室じゃないの？」
「みんな教室に移動してるってさ」
三人が教室に戻ると、アイリスが迎える。
「おかえりなさい。どう？ネオン、黒曜」
「情報がある方が有利なのは当然です」
黒曜が答えた。
「そうね、だから敵も情報を手に入れようとする。黒曜もネオンが得た情報を聞いていれば、対応ができたはずよ。そして、無線機や風送りなら、ある程度技術があれば傍受できたわね」
黒曜は憮然と頷いた。
「…テレパシーはそれができない」
「単純な模擬戦闘でもその有益さが分かるでしょう？」
アイリスが一同を見渡す。
「これから、キャロル姉妹にはあなたたちとの合同訓練を通して、自分の身を守るだけの体術と剣術、銃術などの武術を習ってもらうと同時に、騎士科、ＰＫ科両科の共同戦線を想定した訓練を受けてもらいます」
「…はいっ」
騎士科、ＰＫ科の一同が姿勢を正して敬礼しつつ、お互い剣呑に目を合わせるのをアイリスは見渡し、溜め息を吐いた。
「…それからアゲート・ジェード、テルル・マルメロの両名はこの後私の所にきて。以上で解散します」
アゲートとテルルが顔を見合わせた。

「ネーオン！」
廊下をウイスタリアと共に次の教室へ向かうネオンに、トトが後ろから声をかける。
ネオンが振り向くと、トトの隣りでココがペコリと頭を下げた。
「聞いた？国境でのこと…」

「は？」ネオンは馴々しいトトに眉を顰めつつ首を傾げる。
「反乱軍の攻撃で、一個小隊が全滅だって。怖いねー？こんな時期に、配属待ちの騎士科の生徒を呼び出して、アイリス先生ってばなんの話だろうね？」
ネオンはますます眉を寄せる。
「何？それ…？」
トトが笑う。
「新しい剣王が起ったばかりでしょ？しかも革新的な王だから、まだ国が定まってないんだ。それで反乱軍が調子乗ってるみたい」
「…それって」
ウイスタリアが目を見開いて、トトからネオンへと視線を移した。
「置いてけぼりかもねぇ？ネオン、かわいそうだねぇ？」
トトが毒のように吐き出す言葉がネオンの中にそっと溜まる。
中から犯して壊そうとでもするように…。
「アゲートとテルルが、…配属？」
ウイスタリアが小さく呟いた。

アゲートとテルルは堅い顔をして戻ってきた。
「なんの話だったの？」
目を合わせずに、ネオンが問う。
「…あたしたちが、配属される話よ」
テルルが呆然と答え、周りがざわめく。
「俺が隊長でこいつが副官。一個小隊を任せられるらしい、国境で全滅した隊の代わりに」
アゲートが補足した。
「そう、…おめでとう」
ネオンは言い、部屋から出て行った。
「ボクの言った通りになったでしょう？ネオン」

屋上に佇むネオンの後ろ姿に、トトが声をかける。
「うるさい」
トトはクスクスと笑う。
「泣いてるの？ヒューマノイドのくせに」
「泣き方なんて、しらないわ」
「じゃあ心配？前線にでるあいつらが」
「あたしたちはヒューマノイドよ？死や、死別への恐れなんて、知らないのよ。知ってちゃいけないの」
ネオンは呟き、消えるように黙った。
「じゃあ何を落ち込んでるのさ？」
しばらく待って、トトが首を傾げる。
ネオンは何も言わない。
「ねえ？」
トトの声など聞こえないように黙っている。
「ねえってば！」
再度トトが言い、ネオンの肩を掴んだとき、ネオンは勢いよく振り向いた。
「なんで、あたしだけ、…あたしだけ置いてけぼりなのよ！？」
「そんなの…」
トトは僅かに怯む。
「ボクだってそうだよ！！」
そして叫んだ。ネオンが目を見開く。
「軍に入って、騎士科の代わりに戦って、功績を上げる。そのために、ＰＫを強化させる実験を施されてきたんだ。なのにあんな、人形なんかが先に…」
ネオンは静かにトトを睨む。
「…アゲートとテルルを、人形だなんて言わないで。あたしたちは、あんたたちとほとんど変わらない。人間よ。アスターはそう言ってくれるもの」
「…だったら」

トトは目を逸らす。
「だったら一人じゃないじゃん。…仲間たちみんな、残ってるじゃない。あいつらこそ、たった二人で前線に行くんだよ？しかもつい最近、抗争で隊が全滅したところへ…。そこで、見も知らない大人たち率いて、戦うんだよ？」
ネオンはトトを見た。
「トト？何言ってんの…？」
「バカが、なんにも分かんないで拗ねてるからさ…」
「トトは、配属が怖いの？」
トトの戦闘能力は皆無に等しい。
確かにその能力は有益だが、すぐに配属されないのはその戦闘能力の乏しさ故だ。
今戦場に出ても、自分さえ守れない。
「怖くなんかないよ。ただ、いつになったらボクたちは強くなれるのかな？…あんたくらい強ければ、すぐにでも配属が決まるのに…」
トトの不安は、訓練してもすぐに強くなどなれないことへの不安だ。

「…ネオン」
扉が開く音と共に声が聞こえて、ネオンとトトは振り向く。
アゲートが立っていた。
「…トト？」
トトの姿に眉を寄せ、首を傾げるアゲートを笑って、トトはそちらへ向かう。
「ボクは退散するよ」
そう言って、アゲートの横をすり抜けて出て行った。トトの後ろ姿を少し振り向いてから、アゲートはネオンを見る。
「配属は一週間後だ」
「…そう」
「でも俺、断ろうと思う」
アゲートの言葉に、ネオンは目を見開く。

「俺が断るなら代わってもいいって、黒曜も言ってくれてるし…」
「…どうして？死ぬのが怖いわけじゃないでしょうね？そんなので配属命令を蹴るなんて…」
ネオンの問い詰めに、アゲートは俯いて、それからすぐに顔を上げ、ネオンに近付いて抱き締めた。
「ネオンと離れるのが怖いんだ」
「アゲート…？」
「…ネオンが好きだ」
「え？」
時間が止まった気がした。

E

―別れの終章―

知らなかった。気付かなかった。人に言われて、意識した。
…ネオンが好きだ。
やっと告げた思いは、風に千切られて、彼女に届かなかったのかもしれない。だったらいっそそのまま、消えてくれればよかったのに、未だにアゲートの中に、残っている。

アゲートの笑顔を、ネオンの瞼はなかなか忘れない。目を閉じる度にちらつく、あの少し傷付いた笑顔。
アゲートが自分を好きだなんて、気付かなかったのだ。
『…何の冗談？つまらないこと言ってないで、ちゃんと軍に貢献するのよ。あんたの配属で、何人の人間が助かるかわからないわ』
傷付けるには、充分な言葉。
冗談でも、軍役が怖いわけでもなかっただろう。なのにネオンは、そう言って片付けた。
アゲートは寂しげに笑って、おどけたように敬礼した。
まるで『いつも』を演じるように。

「どうしよう」
ネオンに泣き付かれて、黒曜は溜め息を吐く。
「どうしようって、ネオンもアゲートが好きなら謝ればいいじゃないですか」
「アゲートが好きだよ。…でも黒曜も好き。朱夏も好きだしテルルも白夜も好き。ベリルもバジルもシアルもウィスタもセリーズも、みんな好き」
黒曜は微笑む。
「じゃあそれが答えです。僕もネオンが好きですよ。でも僕やネオンの好きは、アゲートの好きとは違うみたいです」

「…でも」
「傷付けたのが悲しいんですね？」
言って黒曜はネオンの頬を拭って、少し笑う。
「涙腺が壊れますよ？」
「だって…、びっくり、して…」
「傷付けたことは謝るべきです、ネオン。そして自分の気持ちを、ちゃんと伝えないと、後悔しますよ？」

「告白したの？」
ウイスタリアが素頓狂な声を上げる。
「声でかい！」
「なんて言われたの？」
「何の冗談？って…」
しばし沈黙して、ウイスタリアは溜め息を吐く。
「そりゃそうよ。見てれば分かるじゃない」
「ウィスタには言われたくねー」
「何よ？」
「ウィスタかバジルが配属ってことになったら、ウィスタだって同じことするよ。ダメだって分かっててて」
また沈黙が降りた。再びウイスタリアがそれを解く。
「でもこんな急がなくても、ギリギリに言ってもよかったんじゃない？」
「もし俺の気持ち聞いて、ネオンが俺のこと好きになってくれたら、黒曜に代わってもらう予定だったんだよ。ギリギリじゃ変更きかねえだろ？」
アゲートが口を尖らせて側方を向く。
「…期待してたんじゃない？」
「悪いかよ？」
じろりと睨まれて、ウイスタリアは笑った。

「悪かないわよ。…そっか、伝えたのね…」
「ウィスタはどうするの？」
「あたしはもう伝えてるもの。そろそろ諦めた方がいいのかなぁ？」
「バジルがアイリスに告白したら、諦められるのにな？」
上目で伺うようにウイスタリアを見て、アゲートが言う。
「さあね？あいつもフられるの分かってるから、ずっと待っちゃうかもね」
「……ウィスタさ、実はもう諦めてる？」
ウイスタリアは微笑んだ。
「頭ではね」
「……そっか」
アゲートはすっきりした笑顔を見せた。

「アゲート…」
戸口から体を半分隠して呼ぶネオンに、ウイスタリアとアゲートは思わず笑う。
「何やってんの？ネオン」
ウイスタリアがネオンに近付く。
「あの、アゲートに…話が」
「なんだよ？」
アゲートも戸口へ寄ってきた。
「…えっと…」
チラリと見られて、ウイスタリアは一瞬首を傾げ、それから心得たように笑った。
「また後でね」
言い残して教室を去る。
「どうしたんだよ、ネオン」
未だ体半分を壁に隠したネオンにアゲートが言う。
「あの…」
ネオンはやっと壁から離れてアゲートの前に立った。

「さっきの、謝ろうと思って…。びっくりして、あんなこと言ってごめん。アゲートのことは、好きなの。でも、アゲートの好きと私の好きは、違うの。だから困っちゃって、あんなこと、言ったの」
アゲートは笑ってネオンの頭に手を置く。
「ありがとう、ネオン」

「何してるの？」
「……昼寝」
「いつからいたの？」
そこは屋上だった。
バジルは今さっきやってきたウイスタリアから、気まずそうに目を逸らす。
「アゲートがネオンのこと好きって、知ってた？」
「知ってたわよ」
バジルは少し笑う。
「さすが。…アゲートに会った？」
「さっきまで一緒にいたわよ」
「どう、だった？」
ウイスタリアは溜め息を吐く。
「つまりアゲートがネオンに告白するの盗み見てたんだ」
「違うよ！出るに出れなかっただけだ」
「あっそ。ところで、もう誰もいないのになんでここにいるの？」
バジルは目を逸らしたままだ。
「考えてた」
「アイリスのこと？」
「……ウィスタのこと」
ウイスタリアは驚いたようにバジルを見る。
「どうしたらいいのかな？」
「え？」

「俺はウィスタに何もできないのに、お前、そうやって待っててくれるから。だから俺は安心してるんだ」
ウイスタリアは目を閉じる。
「あたしが勝手に好きなんだから、気にしなくていいのよ」
「うそ。なんで好きになってくれないんだろって、思ってるだろ？」
「何言って…」
「俺がそうだもん。なんでアイリスは俺を見てくれないのかって、こんなに好きなのにって、いつも思ってる。だから騎士科を離れたのに、いつだって、辛い。」
声を荒げたバジルを、ウイスタリアは優しく見つめる。
「バジルも、ホントはもう諦めてるのね」
バジルはウイスタリアを見た。
「……そうかも、しれない」
「言わないの？アイリスに」
「……」
ウイスタリアは笑う。
「あの後ね、ネオンがアゲートのとこに来たのよ。…どうなったのかはわからないけど、きっとちゃんと、決着ついたんだわ」
「……そっか」

「黒曜」
呼ばれて黒曜は微笑む。
「みんな、どこに隠れてたんですか？テルルは？」
「テルルはヘルデライト博士のとこだ。私たちはアゲートとテルルの壮行式の予定を、セリーズたちと決めてたんだ」
白夜が寂しげに言った。
「僕も入れてくださいよ」
「だってもしかしたらお前の壮行式になるかもしれなかっただろ？」
朱夏が肩を竦めた。

「…なるほど」
黒曜も笑って肩を竦める。
「アゲートが、行くみたいです」
「…そうか」
白夜が俯く。
朱夏がその頭を撫でた。
「黒曜が行かなくてよかったとは、思っちゃいけないんだろうな、私たちは…」
白夜の言葉に、朱夏はフッと笑った。
「いや、思うくらいかまわねーだろ」

一週間後、アゲートとテルルは赴任地へ向かった。

アゲートとテルルの隊を乗せた船の行き着く先を、ネオンは見る。
「今、一番強いペアはあいつらだったんだからしょうがないだろ？」
ベリルが言う。
「分かってるよ。何も言ってないでしょ？」
「置いて行かれて寂しいし悔しいって、顔に書いてある」

目も合わせないくせに、と思ったが、ネオンは黙ってベリルを睨む。
「オレが強くなったらいい話だろ？」
ネオンは笑い混じりに溜め息を吐いた。
「……せいぜいがんばってよ」
このやろう、とベリルの口が動いたがネオンには届かなかった。

E

―別れの終章―（後書き）

なんだか中途半端に終わったきもしますが、これで『ペア』の連載を終わります。

告白シーンとか別れのシーンとか書くと、どうしてもクサくなるので逃げまくってますが、きれいな告白シーンや別れのシーンが書けるように、これからも精進いたします。

今まで読んでくださってありがとうございました。
今後ともよろしくお願い致します。

２００７２６秋茄子

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9867a/

ペア

2010年10月30日04時41分発行